
チャンス！ -地底遺跡カヴァルダイ-

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャンス！ ―地底遺跡カヴァーデザイン―

【Nコード】

N4642A

【作者名】

よしなが あこ

【あらすじ】

剣の腕前は一級品、頭も切れる生粋の冒険者チャンス。彼と四人の仲間たちが次なる冒険の舞台として選んだのは風の島フェンディア。湖の底に沈んだ遺跡の伝説が残るこの島で、チャンスたちを待ち受ける危険な冒険への扉が開き始めた。

娯楽の街ジナス

「よっしゃあ、またいただきい！」

意気揚々とした歓喜の声が、雑然とした会場の中に響き渡った。たくさんの人垣の向こうで、自信満々の笑みを浮かべているであろう男の様子が眼に浮かぶ。小柄で色黒、短気で喧嘩っ早いバンタム人の盗賊サージは、酒も強いが博打も強い。

フェンディア島随一の娯楽の街ジナスの賭博場は、通常よりも多くの客でごった返している。カード、サイコロ、ルーレット、ダーツ・・・ありとあらゆる類いのゲームが楽しめるそこは、まさにお祭り状態だ。サージの黒い瞳が、いつにも増して輝いていた。

「サージったら、相変わらず調子いいみたいね。あんなに短気なのに、博打の時は勝負が決まるまで絶対顔色を変えないからすごいわ。」

「・・・あちきは博打うちの心境は分かんないわね・・・サージみたいに簡単に勝てりゃ楽しいんだろうけどさ。」

人垣の後ろで振り返る、美女二人。

小振りな純白の翼を持ち、精霊と心を通わせる「天の人」、ファイファス人の精霊使いノーマ。目も覚めるような蒼い布で小粋に髪をまとめ、赤紫色の大きな瞳で会場中を見渡す。もう一方、流れるように波打つ黄金色の髪、男なら振り返らずにいられない肉感的な体つき、そして愛らしい顔立ちが特徴のアルファドローラ人、魔術師エキシィ。いつもなら二人の美貌に見惚れるであろう男たちが、目の前の勝負に夢中になっているのを見つめて呆れ返っている。

「その点、チャンスは博打に興味ないもんね。やっぱリーダーはこ

うでなくちゃ!」

二人が振り返った視線の先、会場の片隅にあるカウンターに座った男は、ため息交じりで小さく肩をすくめながら、ノーマとエキシイに手を振っていた。

世界で最も多く見られる種族、エストナ人の剣士、チャンス。緑色の柔らかな髪を揺らし、空色の鋭い瞳で周囲をゆっくりと見つめている。腰のベルトに下がった黒い長剣の使い込まれた様を見れば、その腕が並ではないことが容易に分かる。サージ、ノーマ、エキシイ、そしてチャンスは、冒険の旅を共にするかけがえのない仲間であった。

二人がチャンスのもとへやってくると、チャンスは珍しく酒ではないものを飲んでいた。

「あれっ、チャンス……どうしたの、ここの酒マズイの?」

「いや。ちよっとな……すっきりしねえんだよ。」

チャンスは暖かいミルクを一口飲み、息をつく。珍しいわね、とノーマが眼をぱちくりさせた。

「エクルフィンの港で散々、ジナスの「チャリット祭」のことを宣伝してたけどさ……祭りって言う割にはただの博打うちの馬鹿騒ぎじゃねえか。チャリット神は少年の姿をしてはいても、神々の中でいちばんの古き神だ。賭博場の儲けのために名前を利用しちゃ不謹慎だ……って、さっきマーティが言ってたぜ。」

「ははっ、やっぱり。マーティならそう言うわね。」

彼等の仲間にもう一人、聡明で容姿端麗なアル人のマーティという男がいる。全能神トレフィノ大神を信奉する高位神官の彼は、賭博場にはいたくないと一人でジナスの教会へ行っている。エキシ

イが笑って相槌をうちながらワインを頼もうとすると、チャンスはそれをそつと制した。

「やめとけ。俺が気にしてるのはそれだけじゃねえ。」
「?」

代わりにチャンスは暖かいミルクを二つ注文し、ノーマとエキシイに手渡した。

「周りの連中の出で立ちを見ろよ。」

賭博場にゴった返す人込みの大半は、剣を携えていたり杖を抱えた異国の連中だ。街人と思しき者は数えるほどしかない。ノーマとエキシイには普通に見えるこの状態に、チャンスはいつになく慎重なまなざしを向けている。

「ほとんど余所者しかいねえだろ、まるで集められたみてえにさ。エクルフィンでも感じてたことなんだが、どうも・・・何か納得がいかねえんだ。」

そう言われれば、とノーマがミルクを口にする。かすかな甘み。

「エクルフィンでのアレは、ちょっとやりすぎだったものね。」

・・・

デュファ大陸での探索を終えたチャンスたちが、次なる冒険の舞台として選んだのは風の島フェンディア。風の神チャリット神が好

んで滞在したと言われる美しい湖が大陸の中央に位置し、その湖を取り巻くように数々の遺跡が埋もれている。

かつて湖の隣にあったという都市はチャリット神の守護のもと大いに繁栄したが、栄華を極め見る間に腐敗していく街人の墮落ぶりを嘆いたチャリット神が、湖を持ち上げて都市の上に叩き落とし、一瞬でその都市は水没した・・・という伝説が残っている。その伝説を裏付けるものとして、深い湖の底に遺跡が眠っているという噂が引きも斬らない。

風の島フェンディアの玄関口エクルフィンには、数多の旅人が行き来し始終賑やかな割りに、街の規模はさして大きくない。というのも、旅人たちの目的はすでに隣街ジナスへと向けられているからだ。

「なあなあ、ジナスって街に賭博場があるんだろ！？なあチャンス、ジナス行こうぜジナス！」

船がフェンディア島に着くまでの間、サージはうきうきと声を弾ませっぱなしだ。念仏のように続くサージの懇願を聞き飽きた四人がうんざりとうなずく頃、ようやく船はエクルフィンの港にたどりつく。夕闇に溶けていく太陽の名残をついばむように、空いっぱい星が瞬きだしていた。

「とりあえずエクルフィンで宿を取ろう。十日も船に揺られっぱなしだったんだ、今日くらい動かないベッドで休まなきゃな。」

「ええっ、そんなこと言わずにジナスへ行こうぜ、地図だとそれほどの距離じゃないんだしさ。」

呆れ顔のチャンスに食い下がるサージの耳を、マーティが後ろからいきなり捻り上げた。

「いい加減になさい！いくらジナスが隣町だからって、歩いて丸一日かかるのですよ！真夜中に歩くのは危険ですし、だいたい自分の欲求のために仲間たちを付き合わせるんですから、もうちょっと謙虚になったらどうですか！」

「あいてて、マーティ！耳はやめろってば！分かった、分かったよオ！」

渋々同意するサージとともに、チャンスたちはエクルフィンの街を歩き始めた。港に程近い宿を探し求める旅人たちの間をすり抜け、街の中央通りから離れた小さな宿屋に足を止め、チャンスはその扉を押し開けた。

「宿をとりたいんだが、部屋は開いてるかい？」

チャンスの声に、店の奥から主が飛んでくる。

「ようこそ、ようこそ皆さん！二部屋でよろしいですか？」

「ああ、頼むよ。ところで・・・」

チャンスは、宿屋の中を見渡した。壁という壁に、眼に悪い極彩色の張り紙が貼られている。

「何だい大将、あの張り紙。」

「あ、ええ。これはですな。」

宿屋の主は張り紙の一枚を引き剥がし、チャンスに差し出した。そこには大きく「チャリット祭」と書かれてある。

「隣にありますジナスの街で、来週からチャリット祭が始まるんですよ。そのご案内ってわけです、はい。」

「チャリット祭？」

「祭りの間、ジナスの街公認の賭博場で、入場無料で目いっぱい遊戯が楽しめるんです。チャリット祭目当ての旅人が大挙してジナスへ押し寄せますからねえ、エクルフィンはその玄関口ですから、こうしてハデに宣伝してるってわけですね。」

マーティが眉をひそめ、チャンスの後ろから張り紙を覗き込んだ。

「チャリット神は全能神トレフィノ大神の従属神ですが、そのトレフィノ大神よりも古き時から存在する古代神なのですよ・・・いくら盗賊や軽業師などに信仰される神だからといって、その名を賭博場の客引きに使うなんて・・・」

「でも神の名を使うからには、ちゃんとした、真つ当な催しものなんでしょう？」

「ええ、それはもちろんですよ。イカサマ行為の防止のほかに、ならず者が暴れぬよう監視官数名が常に会場におりますから。」

「へえ。賭博場に監視官ねえ・・・」

チャンスは鼻を鳴らしてうなずき、張り紙を主に返した。すでにジナスの賭博場に思いを馳せてにやついているサージをちらりと見るが、その場では何も言わなかった。

翌朝、太陽に照らされたエクルフィンの街を見たチャンスたちは、眼を見張る。街の至る所に、宿屋で見たあの張り紙が貼られているではないか。物売りの親父や女将さんたちも口を開くたび、「ジナスでチャリット祭が始まるよ!」と声高に叫んでいる。

「・・・すごい熱の入れ様。稼ぎ時なのは分かるけど、ここまでするとちよつとね・・・」

エキシイが苦笑いしながらつぶやく。極彩色の張り紙に追いついて

られるかのように、チャンスたちはエクルフィンを発ち、隣街ジナスへと旅立っていった。

・
・
・

「もう一回だ！」

チャンスが顔を上げる。ミルクを飲み終えたノーマとエキシィも、同時に顔を上げていた。賭博場の人込みの中、楽しげに響いていたサージの声が妙な調子に変わり始めたのを聞いた三人は、静かに椅子から腰を上げた。

賭博場のサージ

賭博場に違った返す人垣をかき分けていくと、テーブルに座るサージの姿が見えた。

サージがついているこのテーブルでは「二匹の蜘蛛」が行われている。「親」が二つのサイコロをカップに入れて振り、最大数と最少数を除く任意の数字をつぶやく。カップの中にあるサイコロの目の合計が「親」の示した数字よりも上だと思えば、上を意味する言葉「ラドゥ」、下だと思ったら「エレ」と宣言する至極簡単なゲームだ。一対一の単純なきまりだけに夢中になりやすく、「二匹の蜘蛛」は博打の中でも人気が高い。

「お客さん、大丈夫ですか？結構負けがこんでますぜ。」

「親」を務める恰幅のいい黒髭の男が、何となく気の毒そうにつぶやいた。その言葉の先に、焦りが色濃く浮かぶサージの姿がある。

「えっ、サージ負けてんの!？」

エキシイが小さく驚きの声を上げる。聴覚に優れたサージがその小声を聞き取れぬはずもなく、サージはイラついた様子で振り返った。

「負けてんじゃねえ!ここから巻き返してやるんだから、そこで黙って見てろ!」

「・・・珍しい、相当負けてるのね。」

「ああ、珍しいな。ほどほどにしとけよサージ。」

「ノーマもチャンスもそーゆーこと言うなよっ!見てろ、倍にして取り返してやるからな!」

「親」は苦笑いしながらサイコロをカップに放り込み、鮮やかな手つきでテーブルに伏せる。サージも注意深くその様子を見つめ、わずかな動きを逃すまいと目をこらしていた。「親」はちょっと上目遣いに考えて、つぶやく。

「八。」

サージはカップを見つめたまま、答える。

「・・・エレ。」

「親」はうなずき、カップをそっと上げた。サージがハッとして目を見開く。

サイコロの目は、五・六・・・「ラドゥ」だ。

ゲームを見守っている野次馬連中からため息が漏れた。サージも悔しげに軽くテーブルを叩き、デカンターに残った酒を大きくあおる。テーブルに乗せられていたチップを遠慮なく受け取りながら、「親」はサージに微笑みかけた。

「どうします旦那、終わりますか？それとも・・・」

「続けるに決まってんだろ！このまま引き下がるかい！」

「へい、では続けますぜ。」

そこからしばらくゲームは続いたが、五回負けて一回勝つかどうかという、サージにとっては屈辱的な展開が繰り返された。サージの手持ち金が危うくなっているのを知っているチャンスでさえも、我を忘れてゲームに没頭するサージに声をかけあぐねていた。

そうして、負けが八回続いたその時。サージは突然ノーマとエキシィに振り返った。

「おいノーマ、エキシィ！魔力と精霊力が会場内にないか調べてくれよ！」

「えっ・・・サージ、ゲームはイカサマだっていうの？」

「手先を使ったイカサマを、この俺様が見破れないわけがねえ。てことはそれ以外、魔力か精霊力しかねえじゃねえか！」

すると、会場の隅に座っていた藍色のローブを着た数人の男がサージのそばにやってきた。

「その点は大丈夫ですよ、お客様。私どもが、魔力や精霊力によって不正が行われていないかどうか、会場内を厳格に監視しておりますので。」

エクルフインの街で聞いたとおり、会場にはちゃんと監視官がついていたのだ。ノーマとエキシィが顔を見合わせ、そして首を振りながらサージを睨みつけた。

「勝負は時の運よ、負けがこんでるからって見苦しいわよサージ！」

「だっ・・・だってよ、何か変な感じがすんだよ、本当にさ！」

「変な感じって、何よ。」

「そ、それが分かんねえから、こうして頼んでるんじゃないか・・・！」

そう言いながら、泣き出しそうな子供のように顔を歪ませるサージ。

しかし、そんなサージの襟首が、いきなりぐいと引っ掴まれた。うげ、と呻いたサージの背後に立ったのは、高位神官のマーティだった。これまた、美男子のマーティとは思えないほどの憤怒の形相で、サージに向かって怒鳴りかかる。

「サージッ！あれほど言ったのに、こんなに負けるまで博打に夢中になるなんて！あなたには自分を戒めたり律したりする謙虚な心というものはないのですか！？」

「マッ・・・マーティ、高位神官がこんなところに出入りしているのかよ！ナマグサ神官！」

「あなたを監視にきたんです！教会での説教を終えてきてみれば案の定こんなことに・・・もう終わりです、帰りますよ、ほら！皆様、お騒がせしてすみませんでした。これで失礼いたしますので・・・サージ！早くきなさい！」

「あいてて、耳はやめろって言ってんのに！いたたた・・・！」

呆氣に取られながらも、ご機嫌よう、とつぶやいてにやりと笑う「親」の男。

チャンスは、猫に捕まったネズミのようにじたばた暴れながら連れ出されるサージを見つめ、ふと藍色のローブの男たちに振り返った。

「あんたたち、この「チャリット祭」の企画者かい？」

「いえ、私たちは監視官として委託された、隣街キルアの者です。」
「・・・委託？」

チャンスが訝しげに目を細めると、藍色のローブの男たちは、ローブの裏側に縫い取られたキルアの街の印を示して見せた。

「ジナスが運営する賭博場の監視官が、同じジナスの街の者では都合が悪い、ということです。先ほどのように、負けが大きくなると色々な事柄に難癖をつけたがるのが、博打うちの心理ですので・・・少しでも難癖の付け所を減らしたい、というジナス側の思惑なのですよ。」

「なるほどね・・・ジナスとキルアは仲がいいんだな。」

チャンスが含みをもたせてつぶやく言葉尻を、藍色のローブの男の一人が拾い上げる。

「それほどでも。チャリット祭は今年から開催されることになった新しい祭りですので、何もかも初めての試みなのですよ。急に企画が持ち上がって、急に決定したんですから・・・」

すると、別の男が後ろから、その男に何か合図するのが見えた。喋りすぎるな、という意味なのだろうか、藍色のローブの男たちはチャンスに軽く会釈すると、早々に持ち場へ戻っていつてしまう。

「・・・ふうん。」

チャンスは、改めて賭博場を見渡す。

勝って顔をほころばせている者よりも、負けて悔しがり、さらなる勝負に目の色を変えている連中の方が多いように見受けられた。

冒険者が旅の途中で金を失った場合、どうするか。

チャンスは喜怒哀楽が凝縮された賭博場から、静かに立ち去っていった。

キルアへの街道

皆より一足遅れて、宿屋へと戻っていくチャンス。

「チャリット祭」が賭博場の催しものでしかないということを裏付けるように、ジナスの街並みは闇に佇み、静けさに覆われている。中央通りに沿った数件の酒場から、酔っ払いの合唱する声や言い争う怒号などが響いてくる中、チャンスはそれよりも騒々しい喚き声が響いてくる方向へ目を向ける。まさしく、宿屋の方向だ。

「だーかーら！もうちょつとあそこで粘りゃ、元を取り返せたかもしれないねえじゃんか！」

「それが博打うちの愚かしさなのです！程々のところで切り上げる潔さがあるこそ、そういう遊戯を楽しめるものではありませんか！？一攫千金を賭博で得ようなどという不謹慎な考えには、一切！賛同しませんからねっ！」

賭博場からずつとこうなのよと、戻ってきたチャンスへうんざりした顔を向けるノーマとエキシィ。宿屋の一室で繰り広げられている言い争いにちらりと目をやったチャンスは、隅っこのベッドに腰掛けた。

「私たちは冒険の旅の途中でしよう、賭博場に入り浸るためにフェンディア島へ来たわけじゃないんですよ！旅にはお金もかかる、なのにあなたときたら・・・！」

「馬鹿野郎！一攫千金狙って何が悪いんだよ、博打うちつてのはそういうもんなんだよ！冒険に出て危険を冒してお宝を手に入れるのと同じだろうがよ・・・！」

サージがそう言った途端。

チャンスは軽く右手を振りぬく。閃く軌跡がサージの右頬に冷たい風を撫でつけ、その先の壁にチャンス愛用の短剣が鋭く突き立った。

俊敏なサージが防御もできずに立ち尽くし呆然となる側で、マーティもまた口を引き結び立ちすくんでいた。チャンスは、言葉を飲み込んだ二人を睨みつける。

「・・・いい加減にしろ。」

滅多に怒らないチャンスが、滅多に出さない威圧的な低い声を放つ。サージは急にそわそわと落ち着かなくなり、頭をかいたり鼻をかいたりし始める。マーティはそんなサージとチャンスを交互に見つめ、しょんぼりとうつむいてしまう。

チャンスは鋭い目をしたまま、二人に向けてつぶやいた。

「サージ、博打と冒険を一緒にするな。俺たちが命がけで越えてきた危険は、博打のような「安全」な賭けとはわけが違う。」

「・・・ごっ・・・ごめん・・・」

「マーティ、過ぎてしまったことを咎めたって何も戻りゃしないし、いくら正論でも矢継ぎ早に責めりゃ反発を招くだけだ。」

「は、はい・・・すみません・・・」

サージとマーティは、うなだれて素直に反省の意を表した。ノーマとエキシイがため息をついて顔を見合わせる。さすがチャンス、とエキシイがウインクするのをちらりと見ながら、チャンスは続けて口を開く。

「・・・どうやらこの「チャリット祭」には、キルアの街が一枚かんでるみたいだ。キルアってどんな街だったっけ、ノーマ？」

ノーマは急いで荷物を探り、フェンディア島の地図を取り出す。

「キルアの街はフェンディアいちばんの大きな街で、採石場や林業などが盛んだって書いてあるわ。フェンディは未開の部分が多いし魔物も多いらしいから、碎石も林業も命がけでしようね。」

「・・・なるほど、だから人手を確保したいってことか。」

「え？」

「ジナスの賭博場に余所者を呼び込み、金を吸い上げる。金が無くなった連中は働き口を探してキルアへ向かう。ジナスは潤い、キルアは労力を得るってわけさ。相場より安い賃金で働かせても、金に困ってる連中なら不満も言えないだろう。」

チャンスは立ち上がり、壁に突き刺さった短剣を引き抜いた。

「と、いうわけだサージ。キルアへ行けば、おまえみたいな連中がうじゃうじゃいるだろう。どうだ、行って見ないか？」

「ううう、意地悪な言い方すんなよ・・・悪かったってば・・・」

サージがさがるような目をチャンスに向ける。ノーマとエキシイがくすくすと笑いあうと、チャンスも同じくにやりと笑った。

「どっちにしろ、キルアへは行こうと思ってたんだ。キルアを越えないと、チャリット神の遺跡群にはお目にかかれないうって話だからな。湖に沈んだ都市の伝説もあるし、いちばん大きな街のキルアなら、その手の情報も聞けるだろう。今すぐ準備しろ。」

「えっ、今から行くのですか!？」

マーティが驚いてチャンスを見る。チャンスは当然だと言うようにうなずきながら、ザックを背負った。

「平気だよ。酒を飲んでるのはサージだけだし、何が出てきても屁でもねえや。なっ、ノーマ、エキシィ？」

「そうね。賭博場でミルクってのも悪くなかったわ。」

ノーマがチャンスに微笑み返す隣で、エキシィはサージとマーティを睨んでつぶやいた。

「あんたたちのせいで、あちきたちまで真夜中に歩くハメになったんだから。サージもマーティも、キルアに着くまでに頭冷やして仲直りすんのよ、いいわね！」

二人は、しょんぼりとうつぶいた。

「・・・ハイ。」

・・・

港町エクルフィンとジナス、キルアまでの道程は二本の街道で結ばれている。そのうちの一方、いちばん安全な街道は落石で封鎖されていて、森の中や谷間を抜ける危険な街道だけがキルアへの唯一の道となっていた。月明かりもない暗闇の街道を、チャンスたちはランタンの灯りだけで黙々と進んでいく。キルアまで歩いて三日、道程は長い。

「俺たちのヴァーナイ大陸や、この前のデュファ大陸ではお目にかれない魔物がうじゃうじゃいるらしいから、気を引き締めていけよ。夜中は昼間の倍以上危険だからな。」

「・・・だ、だから一晩休んだ方がよかったのでは・・・」

マーティがおずおずとつぶやくが、チャンスは軽く振り返って笑うだけで、返答しなかった。ノーマがマーティにそっと耳打ちする。

「あのまま泊まっても、結局あなたとサージは眠れないでしょ？ だったら歩いた方がいいって、チャンスはそう言いたいんじゃない？」

「・・・は、はい・・・」

言い争いはしても、結局は仲がいい二人のことを、チャンスはよく理解している。サージとマーティは離れて歩きながらも、ノーマのその言葉に小さくうなずいていた。

鬱蒼とした森を歩いていくと、ふとサージが皆の足を止めた。

「・・・何か聞こえる。剣の音だ・・・争ってるぜ。」

「行ってみよう。」

チャンスたちはランタンを揺らしながら、街道の先へと走っていた。進むたびに近づく、争いの気配。鬱蒼とした森の静寂を切り裂いて駆けつけたチャンスたちは、そこに恐るべき光景を見た。

「・・・魔物か!？」

魔物と、盗賊団

サージの聴覚が捉えた音を追いかけて、街道を駆け抜けてきたチャンスたちは、やがてランタンの灯りが届かぬ闇の先に、蠢く何かを見た。

「魔物か!？」

チャンスの言葉に反応し、素早く振り返ったそれらを見て、チャンスがハツとする。

毛に覆われた毬のような身体、そこから生えた兎のような後ろ足。しかし手は細長く骨張っていて、鋭い鉤爪が小さいながらも三本、ランタンの灯りに閃いている。しかもその口が、毬のような丸い体のおよそ半分を占めようかというほどに大きい。

振り返った丸い体の魔物は、口元をだらだらと血に染めてチャンスたちに向き直った。後ろにも二匹、同じ魔物が続いている。いやと言うほど並んだ牙から、涎を滴らせながら。

「跳ねてくるぞ、気をつけろ！」

チャンスが長剣を引き抜き構えたそばで、ノーマが腕輪に手を添えて叫んだ。

「光の精霊アーレイよ、我が名において命ずる！輝くその力にて暗闇を照らせ！」

腕輪から迸った閃光が一気に森中を駆け抜け、チャンスたちの周囲が昼間のように明るく照らし出される。その明るさによって、初めてそこに魔物以外の姿を見た五人。

「あれは・・・！」

三匹の魔物に襲われたのか、戦士らしき風貌の四人の男が、街道沿いに倒れ伏していた。頭を噛み砕かれている手前の戦士以外、それほど外傷は負っていないように見える。

チャンスの眼がぎらりと光った。剣を握りなおし、じりじりと魔物たちとの間合いを詰めていく。同じくマーティも槍を構え、その隣に続いている。魔物たちも値踏みするようにチャンスたちを睨んでいるような気がしたが、見る限り、その魔物に目というものは見当たらない。

「やああっ！」

先手を取って踏み込んだのはマーティだ。いちばん手前にいた魔物へ向けて、電光石火の鋭い突きを繰り出す。魔物は涎を垂れ流す口を開けっ放したまま、マーティの槍を避けて大きく跳ね上がった。チャンスがその瞬間を逃さず同時に跳躍し、魔物の口目がけて剣を振り抜いた。

『あおおおお・・・！！』

魔物の野太い声が、森に染み込んだ。開いた口の端から大きく切り裂かれ、皮一枚で繋がった状態の魔物がどさりと地面に落ちる。汚らしい泥水のような赤茶色の体液が、どろどろと粘液状になってその身体から噴き出していた。

着地した勢いで踏み込んだチャンスが鋭く剣を一閃させると、魔物の細長い腕が弾かれるように斬り飛ばされ、繁みの中にがさりと落ちる。すでに逃げてしまった一匹を追うように、手負いの魔物は威嚇しながら後退りし、チャンスが一步大きく踏み込むと一目散に

森の中へ逃げていってしまった。「あお」という野太い声を短く発しながら。

チャンスは急いで、倒れている剣士たちに駆け寄った。

「おい！しっかりしろ、おい！！」

「・・・チャンス・・・」

マーティが首を振る。チャンスが抱き起こした男は鎧の継ぎ目から、大量の血を流して失血死したらしかった。チャンスは屍をじっと見つめた。

「この傷は恐らく、盗賊か何かの仕業だ・・・さっきサージが聞いた「争う音」があつて、こいつらがやられた。倒れた連中の血の匂いを嗅ぎつけて、さっきの丸い魔物が集まってきた。てことは・・・」

「チャンス！こっち！この人息があるわ！！」

「本当か！？」

ノーマの叫びに駆け寄ったチャンスとマーティは、倒れた男を抱き起こしながら、少し揺さぶってみた。

「おい、しっかり！大丈夫か！？何があつたんだ！」

男は苦しげに眉間に皺を寄せ、小さく口を歪ませた。

「・・・盗賊・・・団・・・ス、スティア様・・・が」

「スティア？」

「た、助け・・・スティア様・・・」

「チャンス、これ以上喋らせては危ない。私が治癒しますから、チャンスはその盗賊団とやらを追って下さい。」

「エキシィとサージが先に行ってるわ、森の向うで争う音が続けるって・・・」

「わかった、二人とも後は頼むぜ！」

チャンスは森の奥へと駆け出した。エキシィが木々に光の筋を残していったおかげで、楽にその場へ向かう事ができる。チャンスがしばらく駆けていったところで、突然轟音が響き渡った。エキシィの魔法だろうか、と考えながら走っていくと、少しだけ木々がまばらになっている部分に二人が佇んでいた。

「サージ、エキシィ！大丈夫か！？」

「ああ・・・手強い連中だったぜ、見るよ。」

サージの衣服が鋭利な刃でところどころ切り裂かれていた。

「酒が入ってるとはいえ、大盗賊の俺様がここまで追い詰められるとは思わなかった。一応三人までは楽に倒したんだが、その次にあった奴がえらく強くて・・・このザマさ。」

「大きな袋二つ抱えて走ってたわ、多分人質か何かじゃないかな。ごめん、取り返せなかったの・・・魔法で応戦したんだけど、弾かれたのよ。」

「魔法を弾いたのか・・・それぞれ魔封じの護符を持ってるか、でなきや魔術師がいるってことかな。てことは、やっぱ俺の出番ってわけか。残りは何人だ？」

「四人よ。袋を抱えてるから、それほど遠くへは行っていないと思うわ。」

「よし、サージ、エキシィ、援護頼むぜ。」

チャンスは森の奥へと静かに駆け出していった。サージとエキシィはチャンスから離れ、身を隠しながらその後が続いていく。暗闇

に目が慣れ、先の方に足音を捉えたチャンスは、腰の短剣を引き抜いた。木々が生い茂る森の中では、長剣は使えない。

やがて、人影が四つ。木々の間を縫うように走っていく。エキシイが行った通り袋を二つ、それぞれ抱えていた。チャンスは押し黙ったままその背後に近付き、影の歩調と自分の歩調を合わせ、自分の足音を紛らわせる。そうしてふっと短剣を振りかざそうとした瞬間、後ろを走っていた影の一人がチャンスに振り返った。

「！」

影は素早く短剣を突き出してチャンスの刃をかわすと、四つの影は袋を放り出してチャンスをぐるりと取り巻いた。放り出された袋が苦しげに呻いている。やはり、人らしい。

「おまえら、盗賊団か。盗賊団が人さらいなんて、どういう風の吹き回しだよ。」

チャンスは明るくそうつぶやく。四人の盗賊団は、何も言わない。ひしめく木々に姿を隠しながら、黒い覆面の奥からチャンスを睨んでいる。手に手に短剣を握り締め、首にはやはり魔封じの護符が下がっている。チャンスはそれらを確認すると、軽く鼻をこすった。

「ちえ、余計な事は喋らないってわけか。じゃあイヤでも喋ってもらうしかねえな。」

チャンスがそこまで言うのと、盗賊たちは無言で躍りかかってきた。

袋詰めの少女

暗闇をまとう影が駆け抜け、チャンスへと躍りかかった。

チャンスは頭上の枝に飛びつくと、足を左右に鋭く振り回す。両側から迫っていた盗賊のうち、一人の短剣が弾かれて遠くの木に突き刺さり、もう一人の頭が蹴り飛ばされて幹に叩きつけられる。チャンスブーツの踵には接近戦用の鋭い金具がついているため、倒れこんだ盗賊の頭から、闇に染まる黒々とした血の流れが見えた。

チャンスが枝を離して木々の隙間に降り立つと、間髪入れず三人の盗賊が襲いかかってくる。チャンスは短剣を振りかざして一人の短剣を止め、弾く勢いで素早く木の後ろに回りこむ。追いつがる刃の軌跡がチャンスの背後にきらめき、軽鎧で守られていない肩口や腹部の衣服がわずかに切り裂かれた。

「俺の一張羅なんだけど、そう簡単に切ってくれるなよ！」

チャンスはそう言うと、細い木の幹を抱きかかえ勢いよくぐるりと一回転する。間近に迫っていた盗賊二人が突然振り回されたチャンスの身体に弾き飛ばされ、もんどりうって倒れこんだ。

「出よ疾風、鋼の刃を持つ矢となりて、我が意に従え！」

エキシィの呪文詠唱が終わると同時に、その両手から波のように幾重にも連なる風の刃が放たれる。チャンスたちの頭上の木々が見る間に切り刻まれ、雨のように一帯に降り注いできた。ハッとして視線が上に向く盗賊たちの隙を見逃さず、鋭いきらめきの筋がそこに集中した。

「がああっ！」

サージが吹き出した毒針が、ひとりの盗賊の顔面に突き刺さる。悶絶して短剣を取り落とす盗賊に、チャンスは短剣を深々と突き立てた。言葉もなく倒れ伏す盗賊の向こう側で、残る二人の盗賊が何事か小さく言葉のやり取りをかわし、踵を返して一気に森の奥へと駆け込んでいった。運んでいた袋も、仲間二人も置き去りにしたままで……

降り注いだ枝を払いのけ、あっと言う間に消え去った二人の盗賊の背中に向けて、軽く息を吐くチャンス。

「ふう、ありがとよ二人とも、助かったぜ。」

繁みの奥から顔を出す、サージとエキシィ。にやりと笑ってサージが首を軽く鳴らす。

「酒で狙いが逸れちゃまずいと思って、針をあるだけ詰め込んで吹いちゃった。二人逃げちゃったけど、まあ一応情報源は手に入れたしな。」

いちばん初めにチャンスに蹴り飛ばされ失神した盗賊を縛り上げたサージは、残された大きな袋に駆け寄ってその口を縛っていた紐を解く。

中身を覗いたサージが、あっと声を上げた。

「……女の子だぜ。」

袋の中には、少し青褪めた顔で気を失った、小奇麗な服を着た少女が横たわっていた。チャンスがもう一つの袋を開けてみると、中には初老の男が詰め込まれていた。チャンスが猿轡を外してやると、男は大きな泣き声を上げてチャンスの手を取り、何度も頭を下げて

感謝の言葉を叫んだ。

「ありがとう、ありがとうございます旅の御方！スティア様をお助け下さってありがとうございます！この感謝の気持ちをどう言葉に
してよいか・・・！」

「大丈夫、感謝は伝わってるよ。ところでそっちのお嬢さんは・・・」

チャンスが隣の少女をちらりと見ると、男は大きくうなずいた。

「そちらはスティア様、キルアの町長ハンク・ヴェンドレー様のお嬢様でございます。」

「キルアの町長の娘・・・！」

「はい、急ぎの用事でジナスへ向かった帰り道に、盗賊団に襲われました。四人も護衛の剣士を雇いましたが、まったく歯が立ちませんで・・・お恥ずかしい限りです。ヴェンドレー家にお仕える侍従長として、お嬢様にもしものことがあったら旦那様に何とお詫びしたらよいか・・・」

チャンスが小首を傾げた矢先、呻き声が聞こえた。先ほどサージが縛り上げた盗賊の男が眼を覚ましたらしい。

「おう、お目覚めか？聞きたい事は山ほどある、とりあえず顔を見せな！」

サージが男の覆面を乱暴に剥ぎ取った。

エキシイの持つ魔法の灯りに照らされた男の顔を見て、サージがハッと息を飲む。チャンスとエキシイもまた、その顔を見て思わず眼を見張った。

額から眼の下まで、漆黒の塗料で禍々しい紋様が描かれた顔は、

暗闇の中で見たらまさに悪魔そのものだ。その禍々しさに輪をかけるように、男はにやりと笑みを浮かべる。何がおかしい、と怒鳴りかかるようにするサージの動きより一瞬早く、男は口を軽く動かした。何か硬いものが割れる軽い音がしたかと思うと、男は突然白目を剥き、全身を弓なりに反り返らせて痙攣し始めた。

「しまった、毒を飲んだか!？」

そのサージの言葉が終わらぬうちに、男は泡を吹き散らしながらあっけなく息絶える。

一切声を上げずに事切れた男をじっと見つめ、チャンスはつぶやいた。

「・・・口を割る前に自ら命を絶つとは、敵ながら見事だ。あの統率力と忠誠心、並大抵の連中じゃないことは確かだな。」

「多分猛毒のルシンの実か何かだろ、俺が前にいた盗賊団でもそれを口に入れとけて言われてた。俺は一度も口にしたことあねえけどな。」

するとチャンスが、それだ、とサージに向けてうなずいた。

「盗賊団といやあ金品を盗むのが本業だ、人さらいをするなんてお門違いもいいとこだ。しかもいざという時には死んで口に蓋をしろってか・・・奴ら、何が狙いなんだ？あんたら心当たりはないのかい？」

チャンスが侍従長に振り返ると、侍従長は首を振った。

「わ、私には分かりかねますが、ただ・・・」
「ただ？」

「先月辺りから、この街道で頻繁に人がさらわれているのです。それもすべてあの盗賊団の連中の仕業に違いありません！以前はキルアやジナスで盗みを働いていたのですが、最近は何故か執拗に人さらいばかりを・・・盗賊団が邪教に魅入られたと、キルアではもっぱら噂になっております。」

「・・・先月から、か。」

チャンスは、横たわった少女を軽々と抱き上げた。

「とにかく、街道へ戻ろう。キルアまで俺たちがついていくから、道中その話を聞かせてくれよ。」

「は、はい、もちろんでございます！どうかキルアまでご同行して下さいませ、こちらからもお願いいたします。」

その話の間に、サージは男の死骸を探り、手がかりがないかを調べていた。

しかし首に下げられた魔封じの護符と短剣以外に、めぼしい持ち物はない。手がかりと呼べるほどのものではなかったが、サージはとりあえずその二つを死骸から外して持って行くことにした。そしてエキシィは、チャンスに抱えられた少女スティアをずっと見つめていた。盗賊団に気絶させられたにしては、やけに長すぎる昏睡に思えたのだ。

『・・・キルアで、何が起きているのかしら。』

チャンスは、サージとエキシィを交互に見たが特に何も口になせず、スティアを木々から守るように抱きかかえ、森の中をそっと歩き始めた。

拳闘士ファイン

風の島と呼ばれるフェンディアへ、なぜ冒険者は赴くのか。

その本来の目的はキルアの街の先、カヴァル湖に向かうことにある。娯楽の街ジナスの賭博場に立ち寄るのは「ついで」のようなものだが、たまにそこが冒険終焉の地となることも珍しくはない。

さして大きくはない島の中央にあるカヴァル湖の周囲には、大小合わせて相当な数の遺跡群が埋もれているとされ、その遺跡群には古代神たちへ奉納された宝物がうなるほど眠っているという。事実、その遺跡の一つを探索したという冒険者たちが素晴らしい財宝を手にはキルアへ戻ってきたという話があり、遺跡群の探索に血眼になる冒険者は後を絶たないのだ。

しかし。

「探索に出た冒険者たちが財宝を持ち帰ってきたという話は、最近とんと聞かなくなりまして・・・」

白髪に覆われた髪の侍従長は、口ひげの奥から静かに話し続けた。歩きなれていないのだろう、デコボコの街道を歩く足元が見た目にも頼りない。

「というのも、古代神チャリットと名も無き古代神たちの遺跡群を見つけられず、途方に暮れて引き返してくる冒険者が多いらしいのですよ。」

「・・・群、ていうくらい遺跡が多いって聞いているが・・・見つけられないってどういうことだい？」

スティアを抱きかかえたまま歩き続けるチャンスが、隣を歩く侍従長をちらりと見た。

「島の者たちはあまりカヴァル湖には近付きませんので、その実情は定かではないのですが、遺跡そのものが見当たらない、という話を聞いた事があります。カヴァル湖周辺はそれだけでなく、強い魔物どもの縄張りですから、じっくり探索する前に魔物との戦いにくたびれてしまうのかもしれませんがな。」

「古い遺跡は魔物の巣窟だ、まるで何も見つからないってのは変だな。」

静かな街道は、白み始めた空の薄明かりでようやく蒼く輝きだした。サージは眠そうにあくびをし、鼻をこすりながらつぶやいた。

「なあ侍従長さんよ、さっきの盗賊たちの話も聞かせてくれよ。」

「は、はい。先ほどの連中は、半年ほど前に島へやってきたと言われていますが、その時はジナスやキルアで盗みを働く程度だったのです。それが先月辺りから急に人さらいなどをやるようになりまして・・・ジナスとキルア双方の自警団が街道を見回って警戒していたのですが、その自警団も行方不明になってしまいましたな。」

「物取りじゃないとしたら、何が目的なのかしら。」

ノーマの言葉に、その背後から返事が届く。

「・・・邪教に魅入られた連中が、さらった奴らを恐るべき儀式の生贄にしてる、とかキルアでは騒がれてるが、馴染みの情報屋は違う事を言ってたぜ。」

マーティに肩を借りながら歩く、まだ少年と言っているほどのあどけない顔をしたエストナ人の男。スティアたちを護衛するために雇われた戦士たちのうち、たった一人かろうじて命を取り留めた。チャンスたちが盗賊団と立ち回りを演じていた頃、マーティとノーマ

マはこの男を救うため二人がかりで治癒したのだ。

「どういうことだ、ファイニディウス？」

チャンスが振り返ると、男、ファイニディウスは片足をわずかに引きずりながら微笑んだ。

「ファインって呼んでくれチャンスさん、自分の名前は長ったらしくて嫌いなんだ。」

「俺のこともチャンスでいいよ、ファイン。で？違うってどういうことなんだ。」

「あの連中は『薄暮の獅子』って呼ばれてて、宝物以外に興味はない。だから一連の人さらいにも、何か宝物が絡んだ理由があるはずなんだ。邪教なんてそんなの、このフェンディアに入ってくるはずがないしな。」

ファインがそう断言すると、肩を貸しているマーティがそれに付け加える。

「この島を守護しているチャリット神は、神の身でありながら聖なる翼を持つ古代神。その羽ばたきは七色に輝き、邪悪なものを一切寄せ付けぬ浄化の力を持っているのです。だからこの地は常に心地よい風に満たされ、穏やかな気候に恵まれているのですよ。」

「そうそう、それだよ。島の者たちはみんなチャリット神の信奉者だ、邪教が興るはずがない。」

ファインはそう言って、首に下げたチャリット神の護符を自慢げにかざして見せた。鋭い鋼の鉾をいくつも埋め込んだ重厚な籠手を両手に嵌めているファインは、自分は剣を持たず素手で戦う「拳闘士」で、護衛や魔物退治などをして修業に勤しんでいるのだと説明

した。俊敏さが命の拳闘士たちは、素早さの神でもあるチャリット神への信仰が特に厚いのだ。チャンスが何事か言いたそうに口を開きかけたが、スティアが腕の中で小さく呻き声を上げたので、言葉を飲み込み再び歩き出す。

サージはファインの自慢げな顔を横目で見ると、小さく毒づいた。

「・・・拳闘士の修行なら人の迷惑にならねえところで積みな。護衛が返り討ちに合うなんて話にもなりやしねえ、拳闘士の名折れだぜ。」

その言葉に、ファインは立ち止まる。

マーティがサージを諭そうとするより早く、ファインはサージに向かって素早く突っ込んでいった。足を痛めているとは思えぬファインの踏み込みに一瞬眼を見張るサージだが、軽々と身を返して鋭い籠手の一撃をかわした。

幼さが残る顔立ちに似合わず、頭に一気に血が上りやすいらしいファイン。苦々しげに拳を握り締め、サージを睨みすえて怒鳴りかかった。

「てめえ！もう一度言ってみろ！！」

先を歩いていたチャンスが振り返る。

ファインと同じ勢いで言い返そうとした矢先、チャンスの鋭い視線が向けられているのに気付くサージ。構えていた手を慌てて降ろし、すかさず口を噤んだ。すでにジナスでチャンスに睨まれてしまっているサージは、これ以上チャンスを怒らせたくないかったのだ。しかし侮辱されたことに激昂し息巻くファインは、なおもサージに詰め寄っていく。

「修行には実戦が必要なんだ、たまたま今回は運がなかったってだ

けで！・・・それをヨソの国からやってきた連中にとにかく言われる筋合いはねえ！！」

「ファイン。」

チャンスが呼びかける。ファインは鋭く振り返った。邪魔するな、と無言で威圧する瞳。チャンスはスティアを起こさぬように、静かな声でつぶやいた。

「実戦は確かに必要だ。でもいちばん大切なのは、毎日の努力だぜ。それと、自分から望んで飛び込んだ実戦の結果に、「たまたま」なんて虫のいいことは言わねえ方がいい。その簡単な言葉の影で三人も死んだんだ。」

「！・・・」

「おまえだって死にかけた、依頼主であるこの二人の命まで脅かされた。命を賭けた戦いには、生きるか死ぬか、二つの答えしかないってのが分かっただろ。運ですら味方にする強い意志がなきゃ、実戦に出ることは修行にならない。無謀と勇気を一緒にしてたら、命がいくつあっても足りないぜ。」

チャンスの言葉に、唇を噛み締めるファイン。

言い返そうと必死に言葉を探すが、ファインは結局何もチャンスに反論することができなかった。チャンスは眠り続けるスティアを抱えなおすと、ファインに背を向けてまた歩き始める。

「その気があるなら、後でまたゆっくり話そうぜ。今はキルアへ向かうのが先だ。」

何も言えずにうつむいてしまうファインに、マーティが優しく寄り添って微笑みかけた。

「大丈夫、あなたはちゃんと運を味方にしました。自分の身よりもスティアさんたちを案じたその心に、チャリット神が応えてくださったのですよ、きつと。」

「マーティ・・・」

「行きましょう、さあ、つかまって。あんな無茶をして、また足を痛めたのではないですか？」

苦笑するマーティに言われて初めて、足の痛みに気付いたファインが口を歪める。癒しの力で腹部の刺し傷は治癒できたが、酷く捻った足にはまだ軋むような痛みが残っているのだ。マーティの肩につかまりながら歩き出すその目の前で、サージはノーマにぎりりと耳を捻り上げられていた。

「サージ、いい加減にしないと、その災いを吐きまくる口を麻糸で縫いつけるわよ！」

「あいててて！悪かったって！ごめんってばノーマツ、勘弁してくれよお！ファイン、俺が悪かった、だから何とか言ってやってくれよ！！」

エキシィが腹を抱えて笑っている。マーティもにこやかにうなずいていた。皆につられたファインが苦笑を浮かべ、やがて笑顔になるのを、チャンスは視線の端で見つめていた。

キルアまで、後一日。チャンスの腕の中、人形のように愛らしい寝顔で眠り続けるスティアは、まだ目を覚ます気配がない。チャンスは皆の声を聞きながら、スティアを抱き上げた時から感じている、わずかな残り香の元を思い出そうとしていた。

『この匂い、何だっけ・・・どこかで嗅いだ記憶があるんだが・・・』

ただひとつ分かっていることは、それが決して香水などという無害な代物ではなく、紛れもない「毒草」の匂いだということだった。

魔窟街道

聞くに堪えない耳障りな言語を引つ切り無しに喋り続けながら、拾い物の鎧を継ぎ足して身体に巻いた大柄な魔物が二匹、ぶよぶよの手に棍棒を握り締めて突進してくる。チャンスはスティアをマーティに預けると、黒い長剣を引き抜いて身構えた。すっかり酒が抜けたサージは短剣とナイフダートと同時に構え、うんざりした顔を魔物に向ける。

「まったく、この街道はどうなってんだ、魔物の通り道にでもなってるのか!？」

思わずサージがそう言いたくなるほど、キルアへの街道は魔物の驚異に曝されていた。夜が明けて周囲が明るくなっても、陽の光がまるで避けているかのように街道は薄暗く、まさに鬱蒼とした樹海さながらだ。しかも、その街道は深い森の中や谷底を渡る危険な場所が多く、街道と呼ぶよりは山道と称した方がいいくらい、まったく整備されていなかったのだ。

チャンスたちが魔物に出くわすのは、これでもう五度目になる。

「珍しい魔物だな、初めて見た。あの棍棒の細工からして、結構手先が器用みたいだぜ。」

「何ノンキなことやってんだよチャンス!早く仕留めちまおう!」

「魔物は陽の光が苦手って、誰が言ったんだっけ?」

「チャンスッ、しっかりしてくれよ!眠くてボケちゃったのかよ!」

焦ってなおさら早口になるサージを尻目にチャンスはにやりと笑い、迫り来る棍棒をすらりと交わす。その瞬間に素早く突き出した剣の軌跡が、魔物の太い首を鋭く切り裂いた。

魔物の巨体は黄土色の体液を噴き出しながら二、三步踏み込み、チャンスに斬られた首がその振動でめりめりとさらに裂け、皮一枚を残して繋がったまま地響きを上げてその場に倒れ伏した。

仲間の壮絶な最期を目の当たりにし、もう一匹の魔物があたふた逃げ出そうとすると、ノーマの鋭い声が響いた。

「樹木の精霊ヘステイエスよ、我が名において命ずる！我に仇なす者を、その雄々しき力の糧として血肉もろとも啜り尽くせ！」

ノーマが手を添えた腕輪から、美しい緑色の光が迸る。すると周囲の木々が突然軋むように揺れ動き始め、鞭のようにしなやかな蔓が森中から這い出してきた魔物へ襲い掛かった。あの独特な言語で悲鳴を上げる魔物を、繭玉のように取り巻き囲んでしまう蔓の群れは、意志を持った蛇の大隊のようだ。

魔物の悲鳴はすぐに途絶え、蔓は静かに解かれて潮が引くようにすらりと森の中へ消えていく。後に残されたのは、あの不器用にながれた鎧の切れ端と、魔物の骨と皮のみだった。

「すっ……すげえ、ノーマさん、こんなすげえ精霊使い初めて見たよ！」

チャンスとサージが魔物の死骸と骨を街道わきの繁みに蹴りこんでいると、ファインの感嘆の声が響いた。ノーマはファインにこりと微笑み返す。

「森の力が強いから、精霊の力も強いだけよ、きつと。」

「いや、そんなことない！俺の友達の精霊使いなんか、同じ樹木の精霊を使っても全然ダメだったよ、せいぜい蔓に花が咲いたくらいで。」

ノーマは、それはまだまだダメね、と笑い転げる。ファインもなぜか照れながら、これ以上ないくらいの笑顔を浮かべていた。その様子を見ていたサージが、ふとチャンスに耳打ちする。

「よおチャンス、ファインの奴、ノーマが気になるみてえだな。」

「かもな。」

「・・・かもなって・・・いいのかよ。とられちまうかもしれねえぜ。」

チャンスは、ちらっとノーマとファインの方を見つめた。

しかし言葉にはせず、サージにはただ軽く微笑んで見せるだけだった。

そうして魔物の死骸を始末した二人がマーティたちのもとへ戻って見ると、侍従長が仰向けに倒れているではないか。マーティはスティアを優しく抱きかかえながら、困ったようにつぶやいた。

「先ほどの魔物の姿を見て、気絶してしまったのですよ・・・まあ、侍従長さんですから、屋敷からあまり外に出たことがないのでしょうね。お気の毒に。」

「ちようどいいや、スティアはまだ起きてないな？」

「はい、まだ・・・」

チャンスは、気絶して目を回している侍従長を注意深く見つめながら、スティアを少し抱き起こし、その口元に顔を近づけた。

「！」

その様子に振り返ったノーマが硬直する。

眠り姫を起こす王子のように、二人が口付けをかわす瞬間のように見えたのだ。

しかしすぐに顔を上げたチャンスは、エキシイを呼んで何事かつぶやく。エキシイもうなずいて、スティアの口元に自分の顔を近づけた。ホッとしたノーマが胸を撫で下ろす間に、くんくんと鼻をならすエキシイが注意深く残り香を捉え、顔を上げた。

「・・・断言できないけど・・・あちきも毒草の匂いだと思うわ。気になってたのよ、気絶にしては長すぎると思って。飲み物にでも混ぜられてたのかな。」

「ファイン、おまえたちがジナスを出てくるとき、スティアは起きていたか？」

話を振られたファインが、スティアを見つめる。

「小さな台車に二人を乗せてジナスを出ただけど、そういえば・・・スティア様はその時から眠っていらしたような・・・」

「じゃあ、なぜ危険な夜にキルアへ向かうことになった？侍従長の指示だったのか？」

「いや、ジナス町長が催したスティア様を歓迎する夕食会が長引いて、それである時間になったんだ。侍従長は夜に帰るのを酷く怖がっていたんだが、キルアでも用事が立て込んでから宿泊してちゃんに合わないって、無理にあの時間にキルアへ向かったんだよ。」

チャンスはそれを聞いてうなずきながら、侍従長とスティアを交互に見つめた。

「侍従長がスティア誘拐を企んだのかと思ったけど、話を聞く限りではそうじゃないみたいだな。でもスティアは毒を盛られて眠らされ、おまえたちは危険な夜に散歩く羽目になっちまった。こりゃあ楽しみになってきたな。」

「た、楽しみって・・・！」

「早くキルアへ行つて、スティアの親父さんに・・・キルア町長に会ってみたいな。ファイン、後でその知り合いの情報屋のところに案内してくれよ、聞きたいことが山ほどある。町長の息がかかってないことが大前提だけども。」

「・・・まさかチャンス、町長を疑ってるのか？」

ファインが訝しげな声を上げたその時、侍従長がハッと目を覚ました。チャンスがにこやかに笑って手を貸し、侍従長を立たせてやる。

「あ、あの魔物は・・・！」

「大丈夫、俺たちが倒したから心配ない。歩けるなら、すぐにキルアへ向かうぜ。」

「ああ、ありがとうございますチャンス様！この危険な方の街道を通るには、やはり皆様くらいの腕の立つ方々に護衛をしていただかないと、私どものような非力な者は為す術もありませんから・・・」

「・・・そういえば、キルアへの街道は二本あるんだったな。」

「はい。本当は、もっと安全で広い街道がこの森の向うにあるのでございます。ですが・・・そちらは先月崖崩れが三箇所に渡って起きてしまい、封鎖されてしまったのです。」

侍従長の説明にうなずきながら、マーティからスティアを受け取り、抱き上げたチャンス。魔物の襲撃に備えて離れないように歩きながら、街道を進んでいく。

チャンスはその間、今までのことを頭の中で整理していた。

『盗賊団が人さらいをするようになったのが先月辺り。しかも崖崩れで街道が封鎖されたのも先月。チャリット祭の開催は「急な話」としか聞いてないが、大体準備期間も含めて先月から考えるのが妥当だろう・・・何だ、まるで人さらいにエサをやるみたいなもの

じゃねえか。』

思惑がぐるぐると頭の中に渦巻くチャンス。薄暗い街道にわずかに差し込む木漏れ日が、細い剣のように地面にいくつも突き刺さっていた。

・・・

狭く暗い石畳に覆われた部屋で、小さな声が染み出す。

「仕損じたか。」

「手強い連中にあたっちゃまって、面目ねえ。」

「仲間が二人もやられたってのか、そいつらに。」

「すんません、結構な手練れで・・・」

石畳の部屋を覆う壁には様々な紋様が美しく刻まれている。チャリット神の印がところどころに配してあることから、どこかの遺跡の内部であることをうかがわせた。

「この『薄暮の獅子』の牙を折るとは、侮れん。気を引き締めてかれよ。」

「お任せを。」

静かに去っていく足音。

残された声は、明らかに笑みを浮かべているのが分かるような、にやついた声を低く上げた。

「・・・カヴァルダインの財宝は我等『薄暮の獅子』のものだ。誰

にも邪魔はさせん、誰にも・・・！」

渦中の街キルア

闇の中で浮かび上がる三つのランタン。

そこには数人の人影が蠢いていた。闇に溶け込む黒い衣服の人影は、床に転がしてあるいくつかの袋を引きずって、広い石畳の部屋を奥に向かって進んでいく。

次第に見えてくる、艶やかな石の足。そして脛。

滑らかに広がる衣服の裾が、豪華な装飾を施したベルトへと繋がり、たくましい胸板を飾る幾重にも重ねられた首飾りが、その石像がかつてもっとも高い地位にあったことを伺わせた。

一枚岩を彫刻したのか、継ぎ目のないその巨大な石像は、ランタンの灯りを反射して、ぼんやりと赤く自身を発光させているようにも見えた。兜のごとく目まで覆う、独特の造りをした宝冠をいただきながら、両手で天を仰いでいる。

「ほらよ『陛下』、新しい『エサ』だ！」

黒い衣服の人影はそう言って笑いながら、石像の足元にある重厚な扉を開いた。

途端に漂い出る冷たい空気を意に介さず、黒い衣服の人影は引きずってきた袋を無造作に中へ押しやる。そこは扉からほんの一步先で鋭く傾斜していて、押し込まれた袋たちはあつというまに視界から滑り去って行ってしまった。

すると、石像は静かに光を放ち始めた。

ランタンの反射などではない、内から染み出すように広がる紅の光が、石像の指先から装飾の先端にいたるまでを染め上げる。

しかし光は、ほんの数秒で静かに消えた。次いで、下品な笑い声が部屋中にこだましながら響き渡った。

「大喰らいの王様だ、まだ満腹じゃねえってよ。」

「もう十五人くらい放り込んでるんだがな。」

「何百人でも食わせてやるさ、カヴァルダインの財宝が手に入るまでな！」

最後に聞こえた声に、他の人影が鋭く振り返った。

「頭領！」

ランタンの灯りの中、笑みの張り付く顔を不気味に歪ませた男。背が高く痩せた身体つきは、その男がアルル人であることを物語る。元は麗しかったであろう端正な顔には、鼻から右頬にかけて大きな傷が走り、細かな傷もあちこちに刻まれていた。腰に何本もの短剣を下げ、長めの髪を白銀に光らせながら、常人離れた鋭い眼光を石像に向ける。

「まあゆつくりやるさ、どうせ他の連中はこの遺跡に近づけやしねえんだ。栄華を極めた古代都市カヴァルダインの財宝は目の前だ・・島の連中全員をここにぶち込むことになるうが、俺たち『薄暮の獅子』は必ず財宝を手に入れる！」

頭領と呼ばれた男は拳を握り締め、石像に向けて振りかざした。その指に光る白い石の指輪が、ランタンの灯りで桃色に輝いている。隣にいた人影が、その男につぶやいた。

「頭領、キルアの町長が色々動いてるぜ。『色々』よ。」

含みをもたせたその言葉に、頭領と呼ばれた男が振り返り、にやりと笑う。

「上等だぜ、いくらでも『色々』動いてもらおうじゃねえか。このダグ様率いる『薄暮の獅子』を出し抜こうとはいいい度胸だ。目のもの見せてやるぜ。」

頭領、ダグは笑い声を上げながら、他の連中を引き連れて広い部屋から歩き去っていく。ランタンが遠ざかり漆黒の闇に包まれていく部屋は、再び静かすぎるほどの沈黙に沈み込んでいった。

・・・

「おお、あなたの方が私の娘を助けてくださったのか、ありがとう、心から感謝するよ。」

チャンスの手を握り締めてにこやかに笑顔を振りまく、キルアの町長ハンク・ヴェンドレー。上品な装いが町長たる威厳を示していた。ハンクの隣にはへとへと侍従長がいて、これまでの道中の経緯を説明している。

「盗賊団に捕まったときにはもう、生きた心地がしませんでした・・・こうしてチャンス様たちに救っていただいたのはまさに、奇跡中の奇跡と言えましょう。私はともかくお嬢様が無事で本当によろございました。旦那様、危険な道中チャンス様は、眠り続けるお嬢様をずっと抱きかかえながら、護衛して下さったのですよ。」

「そうかそうか、本当にありがとうどうチャンス君、今宵は皆様をご招待して歓迎と感謝の晩餐を開こう！チャンス君たちを部屋へ案内してくれ。」

まるでどこかの貴族の城のように、広く豪華な造りの屋敷の中を歩くチャンスたち。黙って召使いの後をついていくチャンスが、ふと左の廊下の奥を見つめると、召使数人が部屋から出てくるところだった。手にした荷物の様子からみて、恐らくスティアの部屋だろう。

結局、ジナスからキルアに着くまで、スティアは目を覚まさなかった。

チャンスに抱きかかえられたまま、眠り続けて旅を終えたスティア。その強力な眠りの力を導いた毒は恐らく、数種類の毒草を混ぜて造られたものではないか、とエキシィとマーティが言っていたのを思い出す。単体でこれほどの眠りをもたらす毒はありえない、と二人が口を揃えて断言したのだ。

どうも落ち着かないサージがきよろきよろと辺りを見回すうちに、チャンスたちは三つの部屋へと案内された。

「ひゃあ、これだけの設備の宿屋に泊まったら、どれだけふんだくられるだろうな。」

真っ白なシートで砂糖菓子のように美しく整えられたベッドは、腰を下ろすとベルトの辺りまで埋もれそうなほどに柔らかい。応接用の家具の美しさは言うまでもなく、艶やかな栗色のテーブルは天井を鏡のように映してきらめいていた。

「な、なあチャンス、俺・・・帰るよ。結局俺は、何の役にも立たなかったし。晚餐なんて、出る資格ないよ。」

立ち尽くしたまま気弱な声を漏らし、ファインはうつむいた。

護衛として雇われながらその役目を果たせず瀕死の重傷を負い、他に三人も命を落としたこと。そしてスティアと侍従長を危険な目に合わせたこと。それは、ファインがこれまで抱いていた自分への

自信を打ち砕くに十分すぎるほどの出来事だった。街道の途中でサージの言葉に激昂したのは、ひび割れた自尊心を守るための精一杯の虚勢だったのだ。

だからあの時、チャンスが静かに諭した言葉は、そのひび割れた自尊心を粉々にするほど衝撃的だった。

「・・・俺、実は・・・魔物とは何度か戦ったことがあるけど、修練以外で人と戦うのは・・・初めてだったんだ。ためらいが拳に伝わっちゃって、一発も当てられなかった。挙句、刺されちゃったし・・・俺は実戦がどういうものか、全然分かってなかった・・・」

チャンスは応接用の椅子ではなく、毛足の長い珍しい紋様の絨毯の上に直に座り込んでいた。ファインのしょぼくれた顔を見上げ、チャンスはつぶやいた。

「・・・俺だって、いちばん最初に人と戦ったとき、おまえと同じだったよ。まあ、死にそうな怪我はしなかったけどな。」

「あんたが?・・・本当に?」

驚いて目を丸くするファイン。チャンスと同じく絨毯に座り込み、信じられないといった顔でチャンスの目を覗き込んだ。チャンスはにこりと笑って言葉を繋ぐ。

「俺が昔世話になってた農場に、こそ泥が入りやがってさ。鳥の騒ぎ声で眼が覚めて納屋に駆けつけると、そのこそ泥は短剣を振りかざして襲い掛かってきたんだ。俺はまだガキで、我流の棒術しか使えなかったから、怖くて足がぐくぐく震えて、立ってるのもやつとだったよ。」

「・・・信じられない。」

「しばらくは気力で打ち合ったけど、最後にはこそ泥の気迫に押し

れて、頭を切られた。痛くはなかったけどスゲエ血が出て、一気に怖気づいちまった。その騒ぎで起きてくれた親父さんがこそ泥を捻り上げてくれて、何とか事なきを得たが・・・親父さんが来てくれなきゃ、俺は間違いなく殺されてたな。」

チャンスは左側頭部の髪を少し分けてファインに見せた。切り傷の跡は思いのほか長く、今でこそうつすらとしか見えないが、その時には相当な怪我だったはずだ。

「ファイン、俺はあの時、無謀と勇気を一緒にしちゃだめだって言つたろ。あれは、その親父さんに言われた言葉だ。俺の怪我を手当てしながら、涙声でそう叫んでさ・・・横っ面を思いっきり引っ叩かれたよ。」

「・・・」

「無謀についてくるのは危険だけだ。たとえ勇気を持ってしても、無謀な行動はたった一つしかない命を落としかねない。もう、その意味は分かったろ。過ぎたことは気にしないこつた、死んじまった三人の分まで、強くしぶとく生き抜きやそれでいいんだよ。」

チャンスはそこまで言うと、ファインの肩をぽんと叩いた。

「せっかくご馳走を振舞ってくれるってんだから、一緒に食おうぜ。おまえは消えかかった意識の中から二人の危険を俺たちに知らせてくれたんだ。おまえの言葉がなきゃ、あの二人は助からなかったんだぜ。自信を持てよ。」

「・・・う、うん・・・」

「それに、あの町長やっぱ怪しいぜ。さっき玄関での会話聞いたらろ？」

「えっ？」

首を傾げるファインに、チャンスは鋭い目をしてつぶやいた。

「娘のスティアが三日もブツ通しで眠り続けてるってことに、実の親父である町長様は一切触れなかったんだぜ。」

晚餐

暖かな湯気を上げた野菜たっぷりのスープ。掴めば指の跡がつくほど柔らかい、ふわふわの白い丸パン。粗塩と香辛料を擦り込み香ばしく焼き上げられた、滴るほどの汁気を湛える大きな塊肉が、テーブルの中央に鎮座している。添えられた野菜と茸の焦げ目が見た目にも食欲をそそる。

淑やかな召使いたちが肉を切り分け、特製のソースをかけてチャンスたちに運んでくれる間、町長のハंकは一人、饒舌に話し続けた。

「私たちの遠い先祖がキルアの街の礎を整え、それから代々ヴェンドレー家はキルアを守り統治する役目を担ってきたのだよ。ジナスやエクルフィンなど他の街との連携もこれまでになく強化されているし、風の神チャリット神のご加護のもと、フェンディア島は今後さらに栄えていくと確信しているよ。」

丁寧に皮を剥いた、甘い香りの果物の盛り合わせを目の前に出されて、エキシイは思わずうっとりとしたため息を漏らす。

「君達のような腕に覚えのある旅の皆さんが、絶え間なくこの島を訪れてくれることで、キルアをはじめ他の街が潤っていくのだ。ありがたいことだと思っているよ。キルアの炭鉱や林業に携わる人手の半数以上は、君たちと同じ旅人たちだからね。」

なるほどね、とにこやかに相槌を打つチャンス。仲間たちは、チャンスの笑顔の裏にある思惑について知っているの、同じように愛想良く笑顔を浮かべている。

晚餐の時間を前に、チャンスはノーマとマーティにこう告げてい

た。

『何でもいい、この屋敷内で情報を集めてくれ。』

簡単な言葉だったが、二人はその一瞬ですべてを理解する・・・
「町長が何かを隠している」と。そしてサージとエキシイには、別の件についてこう話していた。

『街へ出て、ヨソの連中に話を聞いてきてくれないか。』

二人もすぐにピンと来た。侍従長が言っていた「遺跡群が見当たらない」という言葉について、チャンスが疑問を抱いているのだと。侍従長が嘘をついていると言わないまでも、歴戦の冒険者であれば魔物が強いからといって、遺跡の入り口を見落とすとは思えない。そしてチャンスはファインに、こう告げていた。

『いいかファイン、俺と町長のやり取りをしっかりと聞いてけよ。特にスティアの話題には、絶対に食いついて来い。必ずその場面がくる、きっかけを逃すなよ。』

ファインは鋭い瞳のチャンスを前にうなずいたものの、早鐘を打って緊張し始めた胸を抑えることができずにいた。目の前に出された香ばしい肉の味も、感じ取れなくなるくらいに。

チャンスは隣に座ったファインの様子をちらりと横目で見るが、特に何も言わず、話し続けるハンクに相槌を打ちながら丸パンを一口齧った。

が、ふと食事の手を休め、チャンスはハンクに微笑みかける。

「ところで・・・ジナスからキルアへの街道は、本当に魔物が多くて危険だった。侍従長さんが言っていた「もう一本の安全な街道」

の方は、まだ封鎖が続くんですか。」

「なかなか作業が進まなくてね、まだ封鎖中なのだよ。何せ三箇所も崩れたんだ、そう簡単には復旧できんだろうな。」

「なぜ、崩れたんですか。」

「さあ・・・それは私にも分からんな。雨風に浸食されて自然に崩れたという見方もあれば、盗賊団がわざと崩したという話もあるし。」

チャンスがわざとらしく、ああと声を上げて思い出したようにつぶやいた。

「そうそう、その盗賊団の話で思い出しましたが、お嬢さんは大丈夫ですか？道中ずっと眠りっぱなしでしたから・・・」

「ああ、あの子は眠りが浅いのでよく薬を飲むのだが、今回その量をちょっと間違ったのでしょう。心配はいりませんよ。」

あっさりと、ハンクはそう言ってのける。

ファインはハツとして、その瞬間思わず口走っていた。

「し、しかし町長、お嬢様はジナスを出るときすでに眠っていました。それに・・・よく飲むという薬の量を、間違ったりするでしょうか。」

「ジナスでの夕食会で疲れたせいもあるんじゃないかな。たまにはそういうこともある、ということだろう。誰も見ていなかったのだから、誰にも何とも言えんよ。」

「でも・・・！三日も眠りっぱなしだったんですよ、普通じゃないでしょう!？」

「眠っているだけなら、いずれ目を覚めますさ。心配無用だ。」

ハンクはまたもあっさり返答し、肉を一切れ口に放り込む。チャ

ンスは赤い果物を一つナイフに刺し、ハンクを見つめた。

「ごもつともです町長。それにしても、そんな強い眠りをもたらず薬は初めてですよ。よければ少し分けてくれませんか？狩りや罠に応用したいんですがね。」

「・・・すまんが、もう無くなってしまったようだ、残念ながら。」

「ではその薬を調査している方を教えてくれませんか、直に注文しに行きますから。」

「うむ・・・後でな。」

楽しみにしていますとつぶやきながら、チャンスは赤い果物を口に入れた。町長は作り笑顔をわずかに崩し、チャンスを睨むように見ている。チャンスはその視線を無視して残りの肉を平らげると、皿に残ったソースをパンで拭って口へ放り込んだ。

「キルアでは、盗賊団『薄暮の獅子』に対して何か対策を取っていますか？」

ふと、マーティがスープを飲みながらハンクへ問いかける。ハンクはチャンスに向けていた視線をマーティへ移し、軽く首を振った。

「いや・・・まだ有効な対策が取れずにいるのだ。我等も頭を悩ませているのだよ・・・」

「お嬢さんや侍従長さんの命が脅かされたのですから、早急に対策を講じなければなりませんね。『薄暮の獅子』が人さらいをするようになったのはなぜか、町長は御存知ですか？」

「ああいう野蛮な連中の考える事は、私には見当もつかんね。」

「・・・噂では、彼等は財宝以外に興味はないとか。彼等がフェンディアに居座るからには、そうした理由が背景にあるのでしょうか。彼等が我等が目をつけそうな可能性がある遺跡が、カヴァル湖周辺に存在

するのでは？」

「私は遺跡に興味がないので知らんね・・・大体遺跡群など・・・」

そこまで言って、ハンクはにこやかに笑顔を浮かべて立ち上がった。

「すまない皆さん、今日は別の会合があるのをすっかり忘れていたよ。私はここで退席するが、皆さんはゆっくりと食事を楽しんで下さい。では失礼。」

ハンクは努めて自然に振舞い会釈しながら、食堂を出て行った。後に残されたチャンスたちは、笑みをゆっくりと消して互いに顔を見合わせる。

「・・・まあ、こんなもんだろう。さて・・・」

チャンスは一息つくと、改めてにやりと笑って立ち上がり、テーブルの中央にある塊肉に肉切り用の大きなナイフを突き立てた。

「町長様の仰るとおり、ゆっくり食事を楽しむかな。ファイン、このパンもう一握り取ってくれよ、あんまりふわふわで何個食っても食った気がなくてさ。肉ほしい奴いるか、好きな厚さで切ってやるぜ。」

「はいはいっあちき食べるゝ！あんまり褒めたくないけど、やっぱり美味しいもん、このお肉！厚切りでちょうだいね！」

「俺ももらうかな、このソース結構いける。おいファイン、おめえもしっかり食っとけよ。」

ファインは目をぱちくりさせてその様子を見ていたが、サージの呼びかけにハッと我に返った。

「・・・あ、あんたたち、並みの心臓じゃねえ・・・俺もう、胸がいっぱいで食事どころじゃ・・・！」

「今のうちに食べておいた方がいいわよファイン、この後に多分、色々待ってるはずだから。」

ノーマが丸パンを齧って微笑んだ。

「私たちが突っ込んだ話をするから、町長はボロが出ないうちに引っ込んだのよ。彼にとって私たちは『招かれざる客人』だってことがハッキリしたわ。それに、邪魔者への応対の仕方は、どこも相場が決まってるものよ。」

「ノーマさん・・・！」

ファインがよく見ると、それぞれに注がれた果実酒のデカンターには誰も手をつけていなかった。酒好きのサージでさえ、何も言わずに水を飲んでいる。

チャンスは厚切りの肉をファインの皿に乗せ、うなずいた。

「さっきの食いつき方、よかったぜ。後はこいつにしっかり食いつけば上出来ってわけだ。」

チャンスとノーマの笑みの前、ファインもゆっくりとうなずくと、渦巻く不安を無理やり払いのける勢いで皿を持ち上げ、肉に大きくかぶりついた。

ヴェンドレー家の人形たち

だるい身体をベッドに横たえて、スティアはぼんやりと部屋の天井を見つめていた。大きな窓から差し込む月明かりを視線の端で感じながら、独りぼっちのスティアは人形のように静かに息をしている。

食堂から聞こえる明るい話し声には、何の興味も湧かなかった。その代わり、先刻父に言われた言葉が胸の中に渦巻いている。

『いいか、いつものように黙って大人しくしているんだぞ。それがおまえのためなんだ。』

「キルアの町長」はそう言って、スティアを冷たく一瞥し去って行った。

父が町長になってからというもの、スティアの世界から「父」はいなくなった。

街での催しに必ずスティアを連れ回し、良き父親であるという印象を振りまく町長の姿は、キルアでも名士として評判だ。しかし実際、スティアが屋敷の中で父と共に過ごす時間は、ほとんどない。父はいつも、美術品や宝物で飾り付けた自室で食事を取り、休み、くつろぐ。スティアはおろか、召使たちですら部屋に立ち入ることは禁じられていた。

その部屋に増えていく財宝の数々が、優しかった父を変えてしまったのだ。

寂しさはすでに、諦めにすりかわって大分経つ。

『旦那様は毎日のお仕事でお疲れなのでございましょう。少々、屋敷内を歩くのが億劫になっているのですよ。』

侍従長のメイヤーはいつもそう言ってスティアを慰める。小さい頃からスティアを優しく世話してくれるメイヤーだけが、スティアの唯一の相談相手だった。

だから、スティアはメイヤーに勧められるまま、眠り薬を使うことに同意したのだ。

『旦那様より、こちらをお預かりしてまいりました。安全な眠り薬だそうでございます。』

『・・・』

『お嬢様・・・世の中には、見たり、聞いたりしただけで、命を奪われることがあるのです。だからもしもの時に備えて、こちらをどうか・・・お飲み下さいませ。これを飲んで眠ってさえいれば、万一何かあっても、知らぬ存ぜぬで通せますから・・・！』

メイヤーが言わんとしていることは、スティアには痛いほど分かっていた・・・

彼もまた、スティアと同じなのだ。

気付いてはいけないことに「気付いている者」同志、通じる言葉だった。そしてその姿勢を貫くよう、父が無言の命を下したのだ。

小さな瓶を持つ、メイヤーの手は震えていた。

受け取る自分の手もまた、少し震えたのを覚えている・・・

しかし今回、メイヤーは、父が立ち去った後スティアにこう話した。

『お嬢様・・・私やお嬢様を助けて下さった冒険者の皆様は、剣と魔法の素晴らしい腕を持っておりました。それに、眠り続けるお嬢様を大切に抱きかかえ、また足のおぼつかない私のことも気遣って下さる、暖かい優しさを・・・お持ちでしたよ。』

スティアを抱きかかえたまま歩き続けたチャンス、山道に不慣れなメイヤーを気遣い手を貸してくれたノーマとエキシィ、怪我をしているファインを支えるマーティとサージ……

『……チャンス様たちなら或いは、お嬢様や私……旦那様を、呪縛から解き放って下さるかもしれませんね……』

メイヤーの言葉が本気なのかどうかは分からなかった。

しかし、メイヤーが諦めではない、希望の言葉を口にするのを初めて聞いたスティア。鋭い観察眼を持つ彼がそう言い切るからには、チャンスと言う人たちを余程気に入ったのだらうと、漠然とスティアは考えていた。

呪縛……

メイヤーは、そう言った。輝く財宝と、見えない思惑に縛られた、ヴェンドレー家……

解き放たれる日が、くるだろうか。もしその日がきたら、父は……
私は……

横たわるスティアの瞳から、静かに涙が伝い落ちていった。

……

「本当にお泊りにならないのですかチャンス様、お部屋がお気に召しませんでしたか？」

食事を終えて早々に、旅支度を整えるチャンスたちを見て、侍従長のメイヤーがおろおろしながら訪ねる。チャンスはすまなそうに頭を掻くと、メイヤーに向けて微笑んだ。

「とんでもない、あんな立派な部屋に通してもらって申し訳ないくらいだ。美味しい料理をたらふくご馳走になったし、俺たちはちゃんと街中に宿を取るよ。町長さんが会合の帰りに知り合いを連れ帰るかもしれないし、部屋は空いていた方がいいだろう?」

「は、はぁ・・・」

「ご馳走様、料理人の皆さんに「最高でした」って伝えてね。早く安全な街道を直すように、町長さんの尻を引っぱたいてやってよ。」

エキシイがメイヤーの後ろから、袖を引っ張りながらつぶやいて微笑みかける。メイヤーは一呼吸置くとチャンスに向き直り、深々と頭を下げた。

「本当にありがとうございました、チャンス様、皆様・・・どうか、・・・どうかお氣をつけて・・・!」

「そう簡単にやられやしねえって、心配ねえよ。」

胸に仕込んであるナイフダートを確認し、サージが顔を上げる。メイヤーは周囲をちらりと見た後、懷から袋を取り出してチャンスにそっと手渡した。

「いいよ、こんな・・・一緒に街道を歩いてきただけだし。」

「いえいえ、これは私からのほんのお礼です、どうぞ受け取って下さいませ。」

メイヤーはそう言うのと、袋を乗せているチャンスの手を、上からぐっと握り締めた。

「・・・ありがとう、メイヤーさん。ずいぶん貰っちゃったから、後で勘定してみるよ。」

「はい、ぜひそうして下さいませ。」

・・・

名残惜しそうに玄関の脇に佇んでいるメイヤーを時折振り返りながら、チャンスたちは夕闇に沈んだキルアの街を進んでいく。ヴェンドレー家の大きな屋敷は、キルアの街並みにゆっくりと覆い隠されていった。

キルアはフェンディア島いちばんの大きな街だけあって、夜も眠らぬ活気にあふれていた。旅人たちが露天商の親父と駆け引きをする隣で、肌も露わな酒場の女たちが客引きをしている。チャンスはその甘ったるい声を聞き流しながら、まだわずかに足を引きずるファインにつぶやいた。

「ファイン、俺たちの役目は終わった。もう家に帰っていいぜ。」

「えっ・・・」

「俺たちはどっかの宿屋にでも入るから、ここで別れよう。」

あまりにもあっさりした、チャンスの口調。行きずりの者同士だから当然と言えば当然だったが、ファインは少しだけ胸が痛んだ。その痛みに気がついた途端、ファインは我知らず口を開いてこうまくしたてていた。

「ちょっと待ってくれよ、馴染みの情報屋を教える約束だっただろ！こんなところでお払い箱なんて、そりゃないよチャンス！」

「・・・」

「この後一悶着あるって言ってたじゃねえか・・・それとも何か、俺は足手まといだからついてくるなっのかよ！」

「・・・正直なところ、その通りだな。」

ぐっと息が止まるファイン。チャンスは鋭い目でファインを睨んだ。

「遊びじゃねえんだぜ。」

「!・・・遊・・・俺そんなつもりじゃ!」

「命のやり取りに足をつ突っ込むには、おまえにはまだ足りないものがありすぎる。素早さと力強さが拳闘士の命なんだろう? なのにそんな重くてゴテゴテした籠手に頼ってるってことは、まだ腕に自信がねえ証拠だ。違うか?」

思わず、腕に重く食い込む籠手を見つめるファイン。確かに、武器屋の親父に勧められるまま、無理して買った代物だが・・・

「ばっ・・・馬鹿にすんなよ、そんなんじゃねえ!」

「どっちにしろ、今日はここでさよならだ。俺たちに会いたきや、街中の宿屋でも探しな。当分はここにいるからさ。」

チャンスはそう言うのと、さっさとファインを残して歩いていってしまう。サージとエキシイもそれに静かに続き、ノーマはちらりとファインを見て、顔を逸らしていった。

マーティはファインの肩を叩き、すまなそうに微笑みかける。

「・・・それじゃあ、さようならファイン・・・」

立ち去っていく、五人の後ろ姿。あっという間に人垣の中に飲まれて、消えてしまった。

一人残されたファインは、なぜかとても、哀しかった。町長の屋敷の中では、あんなに親しく話していたはずなのに、このあっけない別れは・・・

「なんだよ、それ・・・」

ファインは籠手に覆われた拳を、ぎゅっと握り締めていた。

・・・

「チャンスにしちゃ珍しいな、ああいう追っ払い方はさ。」

「ちよっと可哀そうでしたけどね・・・でも仕方ありませんよ。」

「そうね、彼の安全のためなもの。」

「あちきたちと一緒にじゃ、かえって危険だもんね・・・チャンス、そこにするの？」

街の中心から少し離れた路地裏の宿屋に、チャンスは足を止めた。腰の小物入れに突っ込んだ、メイヤーからもらった袋。貨幣の擦れ合う音とともに、何か別の音がしている。チャンスは鋭い瞳のまま、宿屋の扉を開けた。

「さてと。金勘定でもするか・・・」

街外れの乱闘

裏路地の酒場兼宿屋「ふくろう亭」に入った五人を、恰幅のいいバンタム人の主が出迎えた。短気で喧嘩っ早い気質のバンタム人が、客商売を営んでいるのは珍しいと、サージが目を丸くしている。チャンスは二部屋頼み、部屋の鍵を持って二階への階段を上がっていた。その途中、一階のホールを見下ろすが、それほど混雑はしていない様子だ。

五人は一部屋に集まり、扉を閉めて向き合った。

「サージ、手伝ってくれよ。」

メイヤーから貰った袋を腰の小物入れから取り出すと、ベッドの上にそっと乗せる。無造作に貨幣の音を鳴らすと、耳のいい追い剥ぎ連中が黙っていないからだ。袋を開き、ツーク貨幣を一枚ずつ取り出してシートの上においていくと、七十まで数えたところで、袋の底から紙切れが覗いた。

チャンスはそれを取り出し、開いて見る。

『チャンス様、皆様、旦那様とお嬢様を、どうかお救い下さい。』

旦那様はカヴァルダインの財宝に心奪われ、一番大切な宝物であるはずのスティア様に見向きもせぬようになってしまいました。

旦那様とお嬢様がもとのように仲良く、幸せに暮らせる日がくるまでと頑張っただけでしたが、年老いた私ひとりの力では、お可哀そうなお嬢様すらお守りできそうにありません。どうか、お力を貸していただけませんか。』

「……カヴァルダインの財宝？」

チャンスが思わず口を開く。サージとマーティが顔を見合わせた。

『今は説明している時間がございません、今夜「白き角鹿」という酒場にお越しください。こちらは私の友人が経営している酒場ですので、そこいらの店よりは安心かと思えます。どうか・・・よろしくお願いいたします。』

チャンスたちが食事の後急に帰り支度を始めたので、メイヤーは大慌てで手紙を書いたのだらう。走り書きの文字にその様子が浮かんでいた。

マーティは手紙とチャンスを交互に見つめて、静かに腕を組んだ。

「・・・カヴァルダインとは、栄華を極め墮落し尽くし、チャリット神の怒りに触れて湖を叩きつけられた伝説の街。カヴァル湖の底に沈んでしまったという噂でしたが・・・どういことなのでしょう。」

「チャンス、そのことなんだけどね。サージと二人で晚餐の時間まで街をぶらついてたんだけど、やっぱりカヴァル湖の周辺に遺跡群があるって話、キルアの人たちはよく知らないっていったわ。街の人間が遺跡を知らないって・・・変じゃない？」

「旅の連中はそれを目当てにしてるから疑いもしてねえみたいだが、何だか街の連中の様子からすると、遺跡群の話全体がガセネタくせえぜ。」

エキシイとサージの言葉を聞きながら、チャンスはメイヤーの手紙を自分の小物入れに丸めてしまいこみ、金の入った袋をサージに手渡す。

「・・・メイヤーに話を聞けば、そこら辺の事情は分かるだろう。街に人を集めるために遺跡群の話をでっち上げたのかもしれないが、

噂でしかないカヴァルダインの財宝に、町長の眼が眩んでるってのが解せねえな。」

そこで、ノーマが手を上げた。一瞬で静まる部屋。

ノーマは風の精霊の力を借り、街外れの一軒屋の内緒話も聞き取れるほどの聴覚を得て、周囲を警戒していたのだ。

「・・・近付いてきてる。そろそろここを離れた方がいいわ。それと・・・」

チャンスに向け、苦笑いを浮かべて肩をすくめる。

「さっき追ひ払った仔犬ちゃんも、ここに近付いてきてるみたいよ・・・困った子ね。」

「あの馬鹿、また足くじいても助けてやんねえぞ！」

サージが眉間に皺を寄せて叫ぶと、チャンスはいつもの笑みを浮かべて立ち上がった。

「来ちまったんならしょうがない、実戦ってのがどういふものか見せてやるかな。腹ごなしも兼ねて、街外れの広場まで一気に走るぞ。」

「じゃ、あちきが外へ『運んで』あげる。この建物より外へ、時空を越えて誘わん・・・」

エキシイは魔術師の指輪をかざし、ふっと息を吸い込んだ。鳶色をした魔術師の指輪が闇を吸い込んだかのように漆黒に染まると、一瞬、全員の足元がぐらりと揺らぐ。

再び硬い地面に足腰が立ったと思うと、もうそこは宿の外だった。マーティが思わずため息をつく。

「何度やつてもこの瞬間は好きになれませんが・・・エキシイの魔術はやっぱ凄いですね。」

「当ッたり前でしょ、十人までなら軽いもんよ。ほら、行くよ!」

チャンスたちは街外れ目指して走り始めた。その様子に気付いた遠くの人影数人が、何事か喚きながら追いつがってくる。ノーマが叫んだ。

「前からも来るわ、気をつけて!」

路地から突然数人の男たちが顔を出した。手には剥き出しの短剣を握り締めている。

サージがすかさずナイフダートを放つ。鋭いきらめきの筋が軽い血飛沫に変わると、連中は短剣を取り落として大袈裟に地面を転げまわった。

「手にしか刺さってねえだろ! 大の男がそれくらいで喚くんじゃねえよ!」

呆れ顔のサージが、すり抜けざまに一人の男の横っ面を殴り飛ばした。

チャンスの視線の端に、見覚えのある男の姿が映る。

「あ!」

ファインだった。チャンスたちが泊まっている宿屋を探して、街を歩き回っていたのだろう。

何事か叫ぼうと口を開けるファインには目もくれず、五人は一気にその目の前を駆け抜ける。その勢いに押されて思わず道の端に避

けてしまったファインは、その後を追ってくる何人もの男たちを見てギョツとなる。

血走った目、短剣の輝き。

あの時チャンスが言った「命のやり取り」という言葉を、ファインは思い出した。身体の奥底に沸き出した恐怖に慄く前に、彼等がどう戦うのかを見届けたい気持ちを抑えられなくなる。遠くなっていく男たちの怒号へ引き寄せられるようにして走り出すファインには、両手に嵌めた厳つい籠手がやけに重く感じられていた。

「いいな、絶対に殺すなよ。聞きたいことは山ほどあるんだ。」

「分かってるってチャンス、任しといてくれよ。」

街外れの広場に駆け込んでいくチャンスたちに背を向けて、サージが一人立ち止まって振り返る。懷に両手をつ込み、右手に細く小さくしたレイピアのような武器を持ち、左手には丸い親指ほどの黄色い珠を何個か握りしめている。

「一撃必殺の短剣は使わずにおいてやるぜ。せめてこいつで、ちったあ痛い目を見ときな。」

サージは向かってくる男たちに、黄色い珠を次々と投げつけた。手前にいた男がハツとしてそれらを叩き落とそうと手を差し出した途端、珠は軽く弾けて黄色い煙を吐き出す。煙に包まれた男たち数人は、突然喉元や目を押さえて短剣を取り落とした。

「ぐはっ、何だこりゃ！い、いてて・・・！」

「目や喉に沁みるだろ、俺様特製の目潰しさ。ほらよ！」

空を切る軽い音と共に閃く細い刃の軌跡が、煙を縫って男たちの間をすり抜ける。軽装の男たちの腕や腹部が浅く、だが鮮やかに切

り裂かれ、珠のような血の雫が矢継ぎ早にどくどくとあふれ出す。男たちは情けないほどに哀れな悲鳴を上げ、踵を返して逃げ惑っていた。

「野郎！おい、そっちから回り込め！囲んじまえば楽勝だ！」

「やあね、あちきみたいない可愛い子を捕まえて野郎はないでしょ。」

エキシイに男の太い毛むくじゃらの腕が襲い掛かる。素早くそれをかわしたエキシイは、男の顔へ向けて軽く指を鳴らす。その音と同時に男の顔が瞬間的に炎に包まれ、髪や眉が一気に燃え上がった。

「ふがあああ！」

「早く水に飛び込んじやいなよ！そーれっつと！」

エキシイは顔だけ黒焦げになった男の尻を、広場の中央にある噴水に蹴り飛ばす。

その大袈裟な水しぶきの向うで、マーティが数人の男たちに囲まれていた。非力そうに見えるマーティならば簡単に倒せるとでも思ったのか、どの男も余裕の顔をしている。マーティは哀れみをこめて槍を握り締め、軽く祈りを捧げる。

「父なるトレフィノ大神よ、罪深き子らを許したまえ。」

祈りを終えるや、流れるような手さばきで槍を振り回し始めるマーティの鋭いまなざしに、周囲を囲んだ男たちが息を飲んだ時。目にも止まらぬ柄の一撃を眉間に受け、男たちは息を飲んだ瞬間の顔のまま、白目を剥いて崩折れた。

一方、ノーマは精霊力を使わず、両手に短剣を握り締めて大の男たちと渡り合っていた。サージほどとは言わないまでも、短剣の扱いに長けたノーマは白い翼で軽々と宙を舞い、獲物を翻弄する鷹の

ように的確に短剣を振りぬく。軽い返り血に染まる純白の翼を時折振るい、血を跳ね飛ばしながら美しく微笑むノーマ。

「あんたたちなんか精霊の力なんて、もったいなくて使えないわよ。」

・・・

『す、すげえ、こんな大勢が相手でも、全然物怖じもしてない・・・！』

繁みに潜んで戦いの行方を見守るファインは、乱闘の現場を目の当たりにして体が震えていた。怖れ、不安、興奮、それらが入り混じる不思議な感覚に、自分でも途惑うほどだ。あの騒乱の最中に飛び込んでいききたい気持ちと、傷つくかもしれない不安が胸の中でせめぎあう。

「来いよ、次はどいつだ？こちとら拳で勝負しようってんだ、勝てるかもしれないぜ！」

ハッとして、思わず繁みから顔を上げるファイン。遠くの方で、チャンスが数人の男に取り巻かれている。腰の長剣を抜かぬまま、皮の籠手を嵌めた拳を軽く握り、その場で軽快な足取りを見せているチャンス。短剣を振りかざし、男の一人が飛び掛ってきた。

「ふざけんな！短剣相手に拳でかなうわけがねえ！！」

「さあね、おまえ次第さ。」

鋭く突き出された短剣を素早く右にかわし、低く構えたチャンスは強烈な拳の一撃を男の腹部に叩き込む。息も出来ずに崩折れる男

の短剣を取り上げ、近くの木に軽く投げるチャンス。 幹に鋭く突き立った短剣が、縦一列に四本、綺麗に並んでいた。

「これで四人抜き、と。さあ、次はどうだ？」

あっけらかんと楽しげに、だが鋭い眼光で再び構えるチャンス。ファインの胸が、一際高く、うねるように跳ね上がった。

目覚める拳闘士

「くっそおお！俺だって・・・なめんなあ！」

搾り出すような氣勢を上げ、ファインが繁みから飛び出した。沸騰しそうなくらい高ぶった闘争心がファインの全身を駆け巡っている。だがその勢いを削ぐ小さな影が、真っ先にファインの前へ躍り出た。

「おっと、そうはいかねえぜ！俺が相手だ！」

「・・・サ・・・！？」

誰彼構わず飛び掛ろうとしていたファインに立ちはだかったのは、何とサージだ。

驚いて目を丸くするファインに向けて、ニードルダガーをかざしたサージが素早く踏み込んでくる。その気迫に押されながらも辛うじて防御したファインの目の前に、切っ先のそれたニードルダガーとサージの顔がある。ぎりぎりど力で押し合う二人・・・

ファインが口を開こうとした矢先、サージがファインを睨みつけ小声でつぶやいた。

『この馬鹿野郎！俺たちの仲間だと思われたら真っ先にやられんぞ！遊びじゃねえんだ、さっさとケツまくって逃げろ、このへっぽこ拳闘士！』

『ヘッ、へっぽこたあ何だよ！馬鹿にすんな、俺は・・・！』

そこでサージは、仕方ないといった顔で眉をひそめた。ニードルダガーをわざと足元に落とし、空いた手で素早くファインの胸倉を引っつかむ。そのあまりの速さに、ファインは防御する間もない。

「な・・・わああっ!？」

ファインは抵抗もできぬまま、軽々とサージに投げ飛ばされてしまふ。暗闇に吸い込まれたファインに一瞥を投げかけたサージは、足元に落としたニードルダガーを軽業師のように足先でぴんと跳ね上げ、元通り構えなおして再び喧騒の最中へ舞い戻っていった。

草の生い茂った繁みに叩き込まれたファインは、かろうじて受身を取ったものの、地面に腰を打ち付け苦悶の表情を浮かべる。まさかあの小柄なサージに、こうも安々と投げ飛ばされるとは。ファインは信じられない気持ちで立ち上がり、彼方で繰り広げられる乱闘に目をやった。

すると。

「あれは・・・!？」

視線の先には、あくまでも拳で戦い続けるチャンスがいる。幹に刺さった短剣はすでに六本になっていた。

そして、その後ろに静かに迫ろうとしている、暗い影・・・

「チャンス! 危ねえっ!!」

ファインは籠手の重い金具を外し、チャンスの方向へ投げつけた。チャンスの視線の端にきらめく光、喧騒の中でわずかに聞こえたファインの声。相手にとどめの一撃を繰り出そうと拳を引いた瞬間の出来事に、チャンスは素早く屈み込んだ。右足を軸に振り回し、目の前の禿げ上がった男の足を払う、そのわずかな間。

チャンスの背後に立った影から伸び上がる冷たい刃が、唸りを上げて宙を切り裂いた。屈んでいなければ確実に首と胴体は生き別れだ。ファインの籠手の金具がその直後、闇に浮かぶ影に鋭く叩きつ

けられる。

「ぐあっ！」

影は思わず声をあげる。チャンスはその隙を逃さず、腰に挿した剣を掴んだ。

軽く引き出した剣の柄で、怯んだ影のみぞおちを容赦なく抉る。影は息をひとつ吐き出し、どさりと地面に倒れ伏した。黒い衣服に身を包んだ影のような男は、泡を吹いてだらしなく地面に口付けている。思わずホッと息をつくチャンス。

「もらったぁ！！」

影の男に気を取られたチャンスの背後を、先ほどの禿げ上がった男が捕らえた。

「……く……っ！」

筋骨隆々の太い腕でチャンスの首を取り、一気に締め上げる。呻き声も上げずに歯を食いしばるチャンスは、男の腕を外そうと顔を真っ赤にしてもがいている。周りにいる三人の男が、それぞれ短剣を握る手に力を込めた。

「さっさと刺しちまえ、一匹でも仕留めりゃこっちのもんだ！」

信じられないほど軽くなった箆手の感触も忘れ、ファインはチャンスの苦境を目の当たりにして頭の中がずっと白くなっていくのを感じる。

『あんな強い奴でも、ほんの一瞬の隙が命取りになるのか。』

死と隣り合わせの実戦・・・目の前にあるのはまさに、命が左右される実戦の場だ。

「やめろーっ!!」

繁みから飛び出たファインは、チャンスを取り巻く三人の男に飛びかかった。

目にも止まらぬ拳の連打をかわす術もない男が、顔中をへこませて倒れ伏すと、ファインは返す勢いで鋭く足を蹴り上げ、一人の短剣を蹴り飛ばす。そのままふわりと回転したファインの脚が切れ味鋭く男の首筋に叩き込まれると、男は白目を剥いて頭から地面へ突っ込んでいった。

ファインの真っ白な頭の中には、死への恐怖が渦巻いている。しかしそれ以上に、目の前の男、チャンスの力になりたいという気持ち膨らんでいた。

たとえ自分が怪我をしても、誰かを守りたい。それはファインがこれまで修行した中でも、また護衛の依頼を受けていた中ですらも、感じた事がないものだった。命のやり取りをする上での気構えとは、守るべきものを全力で守りきろうとする意志の強さを、全身に漲らせることだったのだ。

「なっ、何してやがる、そんなガキさっさとやっちまえ!」

チャンス締め上げる男が怒鳴り散らす。

その一瞬、チャンスは首を締められたまま、がくりと全身の力を抜いた。突然腕にチャンスの全体重を感じた男が、やっと仕留めたかと腕をわずかに緩めたその時、チャンスは背後の男の耳を後ろ向きのままがっちりと掴む。ハッとした男が視線を落とすと、顔中を紅くし失神寸前になりながらも、自信に満ちた顔でにやりと笑

うチャンスと眼が合った。

「ひげああああ!!」

チャンスは男の耳の付け根に、鋭く指を突き立てた。柔らかい耳の下部分にめり込んだ強靱な指の力に、禿げ上がった男が思わず金切り声を上げる。その声の隙間に緩んだ腕から抜け出たチャンスは、振り向きざまに強力な拳の一撃を、男の顎に突き刺した。

がきん、と奇妙な音がして、男の歯が数本、血しぶきと共に飛び散る。男はチャンスの拳に大きく吹っ飛ばされ、背後の樹の幹に叩きつけられてだらしなくのびてしまった。

「はあっ!」

チャンスの勝負がついたのとはほぼ同時に、ファインも残る一人の男の脇腹に鋭い肘打ちを突き刺していた。男がゆっくりと倒れ伏す間に、ファインはチャンスに向けて振り返る。

チャンスは首を撫でながら深呼吸をし、二、三度咳き込んだ後、にこりと微笑んだ。

「ありがとよファイン、おかげで助かった。」

「・・・お・・・おう!」

「その調子でもうちよつと手伝ってくれ、先にこいつを何とかしねえと。箆手も軽くなったことだし、戦いやすいだろ? よろしくな拳闘士!」

ファインがハッとして自分の拳を見つめる。余計な重みがない分、思い通りに拳が振るえていたことに、その時初めて気がついた。ファインは少し引きつりながら、無理に笑みを浮かべてうなずくと、なおも迫ってくる数人の男たちに雄たけびを上げながら飛びかかっ

ていった。

・・・

チャンスはその隙に、先ほど背後にいた男に駆け寄り、ぐったりとのびた体を捻り上げ腕と足を縛りつけた。首にかかった魔封じの護符と、腰に差した短剣を見つめるチャンスの眼が鋭くなる。あの時のように顔半分を禍々しい紋様で飾っていないが、キルアへの街道でスティアたちをさらおうとした盗賊団「薄暮の獅子」の者に間違いない。脇に放り出された武器は広刃の曲刀で、盗賊が短剣以外に好んで使う武器の一つだ。切れ味の鋭さが最大の特徴であるこの刃に斬られたら、首や腕などひとたまりもなく跳ね飛ばされてしまうだろう。

チャンスはその男の口を強引にこじ開け、何かを取り出した。小さくて硬い、黒い木の実・・・

「サージの言うとおり、猛毒のルシンの実だ。まさかここに薄暮の獅子まで来てくれるとは、大収穫だぜ。そろそろ終いにしてもいいかな。」

チャンスは耳飾りの一つを外し、口にくわえて息を吹き込んだ。高く空を貫くような音が広場に鳴り響くと、エキシイが目を輝かせ、真っ先に魔術師の指輪を閃かせた。

「はあい、あちきいちばーん！ 猛る炎の力持て、紅蓮の蛇ども、我が意に従えー！！」

鳶色の指輪が一気に炎の色を迸らせ、燃え盛る蛇が無数に吐き出されていく。鎌首をもたげる紅蓮の蛇が鋭い威嚇音を発するのを見

ると、男たちは思わず息が止まった。

「ちまちま魔法を使うのは性に合わないわ、魔術師ってのはこうでなくちゃ！というわけで死にたくない奴はさっさと帰んな、でないところいつらが全身を消し炭にしちまうわよ！！」

静かに腕輪に手を添えているノーマが、エキシイの言葉の後ろでそっとつぶやく。

「大地の精霊デトよ、我が名において命ずる。その雄々しき体を立ち上げて、我に仇なす者どもの魂に恐怖の楔を打ち込め。」

ノーマの隣の土が見る間にごぼごぼと盛り上がり、地鳴りと共に地面が大きく伸び上がった。

「潰されないうちにさっさと逃げなさい。私が一言命じれば、貴方たち全員ぺちゃんこよ。」

ノーマの言葉の間に、泥や小石を滴らせてゆつくりと地面から立ち上がるそれは、たくましき大地の巨人。広場にある木々とほぼ同じくらい、見上げるほどの背丈の巨人が、うごめく小さな者たちを黒い眼窩で睨みつける。男たちは度肝を抜かれ、腰を抜かしながら慌てて逃げ惑った。

その様子を見ていたマーティが、トレフィノ大神の印を刻んだ槍に手を添え、すっと目を閉じる。

「我が父トレフィノ大神よ、彼等の心に立ち込める暗雲を払い、安息の眠りに誘いたまえ。」

マーティの槍から閃光が走る。放射状に輝く光の筋に貫かれた男

たちは、逃げ惑いながら次第に、動作がゆっくりと緩慢になっていく。ふわふわと漂うようによろめくと、男たちはその場で倒れ伏したまま、何とも幸せそうな顔で高いびきをかき始めたではないか。マーティはにこりと微笑んで、眠り込んでしまった男たちを見渡した。

「明日になれば、今日の記憶も消えているでしょう。今はゆっくりおやすみなさい・・・」

「んもう、マーティは優しいんだから。一人二人くらい、先に燃やしちゃえばよかったかな。」

エキシィが軽く頬を膨らませて腕組みすると、マーティはすまなそうに苦笑いを返した。

その横で、ファインは脱力し切った状態のまま座り込んでいた。ぽかんと口を開け、マーティたち三人を見つめている。

「あ、あんたらやっぱり普通じゃねえ！火の蛇、土の巨人、眠りの光？そんなすごい一度に見せられたら、腰の一つも抜けちまうよ・・・！」

よく見ると、ファインの膝が笑っている。たった今まで皆と一緒に格闘していたとは思えない、ちよつと情けない様子のファインを、サージが後ろから軽く小突いた。

「ちえっ、このくらいで腰抜かすたあホントにへっぽこ拳闘士だな。でも、一応認めてやるぜ。おまえはチャンスを助けてくれたんだからな。」

えっと振り返ったファインに、サージがすっと手を差し出す。そこには、ファインが投げた、重々しい籠手の金具があった。

「ほらよ、大事なものなんだろう？ つけとけよ。」

ファインは籠手の金具を見た。ごつごつした、鋭く重い装備・・・皮の籠手だけをまとう自分の拳に目をやり、ファインは一人小さくうなずく。

そつと静かに笑みを浮かべ、ファインはサージに答えた。

「・・・ありがとう。でも、もう俺には必要ないみたいだ。」

チャンスも、遠くからその様子を見つめて、静かに小さくうなずいていた。

無言の依頼

「こいつらを締め上げて口を割らせるのは俺に任しとけ。今のうちにチャンスはファインと「白き角鹿」へ行つてきな。ああ、ウルサイからマーティも連れてつてくれよ。」

自信ありげに胸を張るサージの言葉に従い、チャンスとファイン、マーティは、倒れ伏した十数人の男どもを残して、キルアの街の中央にある酒場「白き角鹿」へと急いでいた。歩きながら、マーティがぶつぶつ文句を言っている。

「まったく、サージはもう・・・ウルサイとは何ですか！でも、私も強引な尋問を見るのは好きではありませんし、だからと言って彼らに聞かなければならないことは山ほどありますし・・・やむを得ません。我が父トレフィノ大神の御示しに従います。」

仏頂面のまま、短く祈って印を結ぶマーティを見つめ、ファインがごくりと唾を飲む。

「そっ・・・そんなにすげえの？サージって・・・」

「サージは手加減が嫌いなんですよ、何をするにも容赦ないタチなんです。バンタム人全般が大体そうなんですけど、サージは特にその傾向が強いですね。エキシィもそれを殊更に煽る困ったところがあるし・・・ノーマがついていてくれるから、全身の骨を折るまではいかないと思いますけど。」

マーティの淡々としたつぶやきに、ファインは顔を引きつらせる。チャンスは苦笑し、ファインの肩を軽く叩いた。

「フアイン、この一連の話にケリがつくまで、俺たちと一緒に動いた方がいいぜ。」

「え・・・」

チャンスに言われるまでもなく、食いついてでも一緒に冒険する気でいたフアインは、先手を取られて目をしばたかせた。チャンスは続ける。

「俺たちというのもそれなりに危険だが、一人の時に大勢に襲われる方がもっと危険だ。俺たちの顔は、恐らくどっちの敵にも知られてる。一緒に戦ったおまえもな。」

「ち、町長と、薄暮の獅子か。」

フアインがもたもたつぶやくと、チャンスはにやりとうなずく。すると、マーティが立ち止まった。軽く鼻を鳴らし、遠くを見つめる。

「どうしたマーティ？」

チャンスの問いに答える代わりに、マーティは街の中心部を指差した。

その方向を見たチャンスの顔色が、サッと変わった。

「まさか！」

チャンスとマーティは脱兎のごとく駆け出した。慌てて後を追うフアインの鼻に嗅ぎ慣れない匂いが届き始めると、フアインはあからさまに嫌悪の情を顔に貼り付けた。

焦げ臭さを通り越した、嫌な匂い。

そして、走るうちにまとわり付いてくる黒煙。

その場に駆け込んだチャンスが息を飲んだ。

もうもうと周囲に立ち込める黒煙の狭間に、紅蓮の炎が燃え盛っている。石で作られた外壁が尚更灼熱の度合いを増し、火炎の勢いは家の中を縦横無尽に駆け巡っている。木製の扉や窓はすでに焦げ落ち、そこから覗く調度品の類いは、もはやすべてが炎に舐め尽されて黒炭と化していた。

手桶を持った街人たちが呆然とその場に立ち尽くし、じっと炎を見つめていた。猛る狂う火炎の猛威に、太刀打ちできないと悟ったのだろう。誰も言葉もなく、視線を炎に吸い取られている。

ファインが呻いた。

「し、白き角鹿が・・・！」

マーティがすかさず槍を振りかざし、刻まれた印に手を添えて目を見開く。

「父なるトレフィノ大神、偉大なる全能神よ、従属神の御力を我が身に宿らせ給え！風の神よ、御力を！！」

途端に弾けた白い光が、マーティの槍に稲妻となって走る。槍を大きく振り回し、勢いよく炎へ向けて振り降ろすマーティの前に、凄まじい風が吹き上がった。

猛烈な風は炎に支配された酒場を取り巻くと、黒煙や火焰をまとう竜巻と化して空へ大きく鎌首をもたげた。唸りを上げる火炎の竜巻を見た街人たちは、悲鳴を上げてそこかしこに逃げ惑い、散っていく。そして赤黒い光に満たされ轟音鳴り響く竜巻は、見る間に火炎を上空へ吸い上げ、そして静かに消えていった。

マーティが槍を引くと、酒場の中に残っていた一陣の風が、軽く槍へまとわり付いて消失する。槍を握り締めたまま、マーティは紫の瞳に怒りの色を浮かべていた。

「何て酷いことを・・・！」

チャンスは屋根の落ちた無残な焼け跡の酒場に踏み込んだ。

風に吸い上げられた肉の焼ける匂いが、再びじわじわと部屋に充滿し始めていた。激しく内臓を刺激する「焼けてはいけないもの」の匂いに、ファインが口を押さえて嘔気を堪えている。チャンスもまた、時折顔をしかめて鼻をこすらずにいらなかった。

白い煙が未練がましく立ち上る部屋の中には、消し炭に埋もれながら、人と思しきものが数体転がっていた。目を背けたくなるような無残な亡骸・・・

性別や年齢はおろか、どれがメイヤーかどうか、もはや確かめる術はなかった。

が。

「？」

一つの亡骸の口に、何かが挟まっていた。チャンスがそれをついと引くと、亡骸の顎が音もなく折れる。掌よりも小さい、石版のようだ。煤に汚れた表面を、チャンスは躊躇なくごしごしと手でこすってみる。そこには小さく細かい文字や記号が隙間なく刻まれ、こすったせいで黒い煤がその溝に閉じ込められ、尚更鮮明に浮かび上がっていた。

横でその様子を覗き込んでいたマーティがハツとする。

「チャンス、これは神語です！この部分・・・ほら、『カヴァアルダイン』とありますよ・・・！」

「・・・じゃあ、これがメイヤーってことか・・・ちきしょう、もう少し早くここへ来てたら・・・！」

石版を握り締め、チャンスはメイヤーの無残な亡骸を見つめた。

あの炎に飲み込まれながら、必死に悲鳴を押し殺してこの石版を噛んでいたのだろうか。それとも先に何者かによって殺された後、断末魔の中でこれを守ろうとしたのだろうか。火をかけられ、炎が見る間に部屋を覆い尽していくのを見つめながら・・・

この焼け跡からその証拠を見つけることは困難だったが、どちらにせよメイヤーは、確かに自分がここにいたということを証明し、チャンスたちに伝えるべきものを守り抜きながら、炎の中でその生涯を閉じたのだ。

「・・・マーティ、頼む。」

「はい・・・」

石版を握り締めたまま、怒りに燃える瞳を伏せて焼け跡を出て行くチャンス。マーティはその静かな後ろ姿を見つめ、そっと槍に手を添えた。

「我が父トレフィノ大神よ、迷える哀れな魂たちを光のもとへ導き給え、刻まれし苦しみと痛みを癒し給え・・・」

背後で暖かく広がっていく、優しい悼みの光を感じながら、チャンスは厳しい表情で手の中の石版を睨んでいた。

依頼主になるはずだったメイヤーは、死んでしまった。

何が起きているのかも、何を依頼したかったのかも、語ることも・・・

だが、手がかりはチャンスの中にある。

死を越えて、メイヤーが遺した、たったひとつの鍵。

「・・・メイヤー、あんたの依頼は俺が必ず果たしてやる。あんた

の墓に、必ず勝利の報告を届けてやるから、待ってろよ・・・！」

チャンスが石版を懷へしまうと、誰かがしゃくり上げている声に気付いた。振り返ってみると、ファインが目頭を押さえて、静かに泣いているではないか。跳ね上がる嗚咽を無理に押し殺しながら、あふれ出る涙を必死に拭っている。

チャンスの不思議そうな視線に気付いたファインは、目を乱暴にこすりながら顔を上げ、自分の頬を二度叩いて背筋を伸ばした。努めて平静さを装い、ファインはチャンスを見た。

「・・・チャンス、この後でちゃんと話そうと思ってたんだけど、実は俺・・・俺の本当の名前は、ファイニディウス・エンヴェルドじゃ・・・ないんだ。」

チャンスが目を見張る。マーティも同じ顔をしてファインを見つめた。

ファインは拳を握り締め、涙を一粒頬に落とす。

「俺の本当の名前は、・・・ファイニディウス・ヴェンドレー・・・」

・・・

大乱闘の跡が生々しく残る広場に、くぐもった悲鳴が断続的に続いていた。

「さっさと、白状、しろよ！こら！何とか、言えよ！」

黒い衣服をまとう『薄暮の獅子』の盗賊は、かろうじて保たれている理性で言葉を飲み込み、代わりに獣のような声で悲鳴を上げた。盗賊をうつぶせに倒して縛り上げ、その口には布切れが突っ込んである。サージは短く言葉を切るたびに、盗賊の左腕を内側へじりじりと握り上げていく。

自害用に口に入れていた猛毒のルシンの実は、チャンスにすでに取り上げられているため、盗賊は為す術もなく苦痛に耐えねばならなかった。布切れを突っ込まれ舌を噛む事もできない盗賊の右腕は、すでに怪力のサージによって捻り折られ、作り物のように投げ出されている。

エキシイが盗賊の目の前にしゃがみこんで、美しくも冷たい瞳で盗賊を睨む。

「ねえ、強情張らないで、もう喋っちゃった方がいいよ。右腕折られても耐えたのはエライけどさ、左まで折られたらおしまいよ。」

「ぐ……う、うお……うぐぐ！」

「え？何？それでも構わないって？エライなあてめーは。じゃ、遠慮なく握ってやろうな。」

呻き声を勝手に解釈し、にやついたサージは盗賊の左腕を握る手に力を込めた。

盗賊は布切れを突っ込まれたままの口を大きく開け、必死に首を振りながら泣き喚き始めた。すかさずノーマがその布切れを外し、代わりに革の口枷を嵌める。舌を噛み切れぬよう顎と歯を固定された盗賊は、荒い息の下から涙声で叫んだ。

「やめ、やめてくれ、助けてくれ、何でも話す、話すからあー!!」
「そうこなくっちゃ。さあ、血を吐くくらい洗いざらい話しちまいな。そしたらゆっくりこの腕を戻してやるぜ。」

サージはわずかに盗賊の腕を戻してやる。

涙と鼻水と唾液に濡れた顔を歪ませて、男は必死に言葉を繋ぎ始めた。

静かなる誓い

現キルア町長のハンク・ヴェンドレーは、かつてフェンディア島を探索にやってきた冒険者のひとりだった。様々な遺跡を捜し歩き、その財宝を手に入れるために島中を歩き回っていたハンクは、たちの悪い熱病に冒されて探索途中の森で倒れ、魔物の餌食になるのを覚悟したまま、意識を失った。

「それを助けたのが、俺の母さんだ。」

ファインは小さくつぶやいた。

鬱蒼とした深い森の中を慎重に進むチャンスたちは、探索に必要な荷物や食料を詰めたザックをそれぞれ背負っている。明け方のひんやりとした空気を押しのけ、森の中へ消えていく一行。

森で暮らす樵の家で育ったファインの母リベラは、ハンクを家に運びこみ、手厚く看病した。二人はやがて惹かれあうようになり、キルアの街外れの小さな家で、共に暮らすことになった。冒険に飛び歩く生活は変わらなかったが、ハンクは必ずリベラの下へ戻り、土産話を自慢げに聞かせていたという。

しかしその後。

「土地の奴らより遺跡の事情に詳しくなったハンクに目をつけたのが、薄暮の獅子だったんだ。奴らは美味しい話を餌にして、巧みにハンクに近付いた。」

サージが眉間に皺を寄せたままつぶやきながら、短剣をぶんと一振りする。片隅から飛びつこうとしていた灰緑色の大きな蜘蛛が、両断されて地面に落ちた。

貧しい農村の生まれだったハンクは、財宝や金に対する執着心が強かった。しかも、知識はあっても剣の腕は並程度で、強い魔物がうろつく遺跡の中までは踏み込めずにいた。リベラに戦利品を持ち帰るどころか、魔物に返り討ちにあって怪我をすることの方が多かったのだ。

そこに、薄暮の獅子が持ちかけた面白い話・・・

『遺跡の位置さえ教えてくれれば、戦利品を山分けしてやる。』

もともとカヴァル湖周辺の遺跡群は、深い森と入り組んだ岩山に隠れて見つけにくいものだったらしい。ハンクは最初渋っていたが、やがてその話に同意し、形だけではあるが薄暮の獅子の仲間という立場になったのだ。

「薄暮の獅子は半年前にこの島に来たって、メイヤーさんが言っていましたか・・・」

「そう、話はそこなんだよ。」

マーティの質問に、サージがうなずいた。

生い茂った気味の悪い草を踏み均して休憩場所を作り、腰を下ろして水袋の口金を外すエキシィ。軽くあおると、水の跳ねるくぐもった音が水袋の中に響いた。

遺跡を荒らす上に、他の冒険者を殺し財宝を横取りする薄暮の獅子。キルアをはじめ、カヴァル湖周辺の街や村は薄暮の獅子を追い出すために、自警団を作ったり屈強な冒険者たちに退治を依頼したりと、策を講じ出す。

次第に罪の意識に駆られ始めたハンクに、薄暮の獅子は驚くべき提案をした。

『騒がしくなっちゃったから、俺たちは一旦島を出る。この金を置いていくから、おまえが俺たちを追い出したことにしちまいな。そうすりゃおまえは英雄だ、地位も名誉もついてくるぜ。』

『え、英雄！？』

『ああそうだ・・・だが忘れるなハンク、薄暮の獅子がある限り、おまえは俺たちの仲間だ。俺たちはまた必ず戻ってくる。その時、英雄の座に立ったおまえは、俺たちの仕事を手助けするんだ、いいな。これは俺たちの掟だ。』

そうして薄暮の獅子は、フェンディア島を後にした。

薄暮の獅子に言われたとおり、ハンクは渡された金を前キルア町長に届け出て、私が奴らを追い出してこの金を取り返したのだ、と言いつつ。前キルア町長は 大金を前にして疑いもせずその話を信じ込み、ハンクは目論見通り英雄として祭り上げられることになった。

そして、英雄となったハンクに前キルア町長は、自分の娘を貰ってくれと願い出たのだ。

「町長の娘と結婚するということは、次期町長の座を約束されたも同然だ。母さんは、見せ掛けの英雄になって有頂天になったあいつに、あっさりと捨てられてしまったんだ・・・」

「・・・最低ね。」

静かなファインの声の隣で、ノーマが眉をひそめた。黄色い花が咲き乱れる木々の間に入った一向は、見た目と裏腹の強烈な刺激臭に鼻を押さえ、小走りにそこを立ち去る。

町長の娘と結婚し、新しい新居を得たハンク。屋敷には小間使いや侍従もいて、その生活は貧しい頃に見ていた憧れの夢、そのもの

だった。

「その屋敷の侍従の中に、メイヤーさんがいたんだ。」

ハンクにリベラという前妻がいたことを知ったメイヤーは、リベラの下へ「手切れ金」を手に出した。かつての妻という立場を利用し、ハンクに強請りたかりをするのではと勘繰ったのだ。

しかしメイヤーは、リベラの窮状を目の当たりにし、困惑したという。

メイヤーが訪れた時、リベラは臨月間近の身重な体で必死に機織をしていた。生まれてくる子供のために少しでも蓄えを作ろうとしていたのだ。しかも、メイヤーが自分の心を恥じなくなるほど、リベラは心の優しい女性だった。

『あの人が幸せになるなら、それでいいんです。私にもこうして、おなかの中に幸せが宿っている。この子がいるから、私は大丈夫です。』

リベラは気丈にそう言って、大きな腹を撫でながらメイヤーに微笑んだという。

「その時の子が、俺だ。その後もメイヤーさんは、何かと母さんを助けてくれた。お金や食べ物を持ってきてくれたり、薬を分けてくれたり・・・」

フアインは遠い目をしてつぶやいた。陽が落ちて薄暗くなった森の中、歩みを止めたチャンスたちは木々の間に陣取ると、薪を集めて火を起す。赤々とした炎がようやく立ち上った頃、周囲はもう暗闇に包まれていた。

慎ましくも幸せな日々がゆつくりと過ぎていったが、ファインは四つになった年、リベラは流行病に冒された。メイヤーの必死の看病の甲斐なく、静かに息を引き取ったリベラ。母にすがって泣くファインを抱きしめ、メイヤーも静かに涙を流した。

「独りぼっちになった俺を、メイヤーさんは知り合いの拳闘士エンヴェルド師範の家に連れて行った。子供がいなかった師範は喜んで俺を養子として迎えてくれ、俺は路頭に迷わずにすんだんだ。そして、その時ちょうど、ヴェンドレー家にも子供が生まれていた。それが・・・」

「スティア・・・か。」

チャンスの声に、ファインは力なくうなづく。

「俺が十二を過ぎた頃、メイヤーさんはすべて俺に話してくれた。俺が本当はハンク・ヴェンドレーの息子で、スティア様が腹違いの妹だってことを。」

焚き火の炎を見つめ、ふと思い出したように目をそらすファイン。昨晚見た、あの凄まじい情景が脳裏を過ぎったのだろう。チャンスもそっと目を伏せ、薪の枝をぱきりと折った。

「メイヤーさんはいつも、スティア様がキルアへ行き来する時、俺を護衛に選んでくれた。立場が違ってても兄妹と一緒にしたいって気持ちがあったんだと思う。俺はメイヤーさんの役に立てるだけで嬉しかったから、一所懸命護衛を務めたよ。まあ・・・その一所懸命が足りなくて、この前は死にかけたけどさ。」

ファインは恥ずかしそうに頭をかいた。

「あんたたちと一緒にキルアへの街道を歩いている時、俺はメイヤーさんとろくに口をきかなかっただろ？それは、俺がメイヤーさんに頼んだからなんだ。町長やスティア様は俺のことを知らないから、何かの拍子でばれたらメイヤーさんに迷惑がかかると思って。」

「なるほどな・・・おまえに愛想つかしたのかと思ったけど、そんな事情があったのか。」

チャンスが静かに呟きながら、焚き火で炙った干し肉を噛み千切る。サージも小さな固焼きパンを口に放り込み、その先を繋いだ。

「半年前にフェンディアへやってきた薄暮の獅子の頭領は二代目なんだそうだが、先代の頭領から、ハンクとの約束について聞かされていたことだけは間違いない。でも表向き薄暮の獅子に協力する振りをして、ハンクはすでに薄暮の獅子を裏切っている、とか何とか言ってたな。」

「どういうことだ？」

「そこに、カヴァルダインの話が絡んでくるんだよ。」

チャンスの率直な問いに、サージは真剣な目を向けた。

「薄暮の獅子二代目頭領は、盗賊には珍しいアル人で、しかも魔法を使うらしい。奴らはフェンディアに来て半年で、幻の古代遺跡カヴァルダインを発見したんだとさ。」

「やはり、カヴァルダインの遺跡は実在したのですか！？」

「そうらしいわ。カヴァル湖の地下に広大な古代遺跡が広がっていて、その莫大な財宝を得るために人さらいをして生贄にしてる、とか言ってたもの。財宝のための生贄なんて、意味がよく分かんないけどね。」

エキシイがそう言いながら小さなチーズを摘んだ。生贄という言葉

葉に、マーティがあからさまに嫌悪の表情を浮かべる。いつもはそんなマーティを茶化すサージだったが、少しだけ肩をすくめたくらいで、それ以上ふざけることはなかった。

「ハンクはその生贄を薄暮の獅子に提供する為に、ジナスの賭博場で「チャリット祭」を開き、人を呼び寄せて金を吸い上げ、自然にキラアへ向かうよう旅人を誘導していたのね。安全な街道の崖を崩落させたのは薄暮の獅子の連中だけど、それはすべてハンクの指示で行われたそうよ。」

「ノーマ、ハンクの裏切りって何ですか？」

マーティの葡萄色の髪が、焚き火の紅い炎に照らされて不思議な色合いを見せる。ファインも身を乗り出してノーマを見るが、その先はサージが答えた。

「十数年前はただの野盗扱いだったのに、今は薄暮の獅子って名前が頻繁に飛び交ってるだろ？ かつての仲間、現町長サマがバラしたのさ。実際ハンクは薄暮の獅子に懸賞金をかけて、金に飢えた冒険者とか剣士とかを煽ってるしな。町長っていう美味しい立場を守りたいんだろうが、つまんねえ野郎だ。」

「昨日私たちを襲った連中もその類いよ。私たちを殺すように言われたって・・・それを依頼したのがハンクの屋敷の使用人らしいわ。晚餐で突っ込んだ話をされたから、ハンクは私たちが秘密に感じていたと思ったのね、きっと。」

ファインの驚きの表情を前に、ノーマは干し葡萄を摘んで口に入れた。エキシイは足を伸ばしてため息交じりにつぶやく。

「薄暮の獅子壊滅のために、ハンクは強い連中を集めて討伐隊を作ってるんだって。薄暮の獅子が人さらいをしやすいように土台を

整えておきながら、その体たらくでしょ。傍目には勇敢な町長様だけど、あちきから見りゃ、薄暮の獅子からカヴァルダインの財宝を横取りしようとしてるみたいにしが見えないけどね。薄暮の獅子もそう言ってたしさ。」

「だから連中はスティアを狙ってるんだよ、娘さえ人質にしちまえばハンクを手玉に取れるだろ。」

じっと黙って皆の話を聞いていたチャンスは、遠くで響く鳥の鳴き声を聞きながら顔を上げる。空色の瞳が焚き火に照らされて赤く輝いていた。

「メイヤーは、ハンクが薄暮の獅子と繋がりがあつたことを知つたんだらう。スティアを守るために葉まで使つて、必死だつたんだな。俺たちにそのことを告げるために、文字通り命を張つたんだ・・・ハンクも薄暮の獅子も、カヴァルダインのことを漏らされちゃ困る立場だ、その二つに狙われることは当然知つてたはずだからな。」

「メイヤーさんを殺したのは・・・どつちなのか？」

ノーマの小さな問いかけに、焚き火の周囲がふと静まり返つた。猛り狂う猛火の残像が頭の中に蘇り、チャンスは鋭い目をして言い放つ。

「手を下したのがどちらか一方だとしても、結局両方に殺されたも同然だ。俺はどっちも許さない・・・依頼人を殺されて黙ってられるかよ。」

滅多に怒らないチャンスが、瞳の中に静かな怒りの光を揺らめかせている。ノーマとエキシィは目を見合わせ、サージとマーティはじっとチャンスのつぶやきに聞き入っていた。

「・・・俺、最後まで・・・メイヤーさんに恩返しできなかった。
これから、もっとメイヤーさんの役に立ちたいと思ってたのに・・・」

ファインが消え入りそうな小さい声を漏らす。

チャンスはうつむくファインをちらりと見ると、突然その頭を軽く殴り飛ばした。何すんだよ、と言いかけたファインに、チャンスは鋭い視線を突き刺し睨みつけた。

「馬鹿野郎。ファイン、恩返しってのは、その人が生きてる間だけやりやいいってもんじゃない。むしろ死んでからの方が勝負なんだけ。」

「え・・・」

「賞賛も報酬もなく、誰も見てない、気付かないことを続けてこそ、本物だ。相手が生きてようが死んでようが、そんなことは関係ない。信念を持って生きるファイン、愚痴や後悔を喜ぶ死人はいねえぞ。」

「・・・チャンス・・・」

エキシィが小さく拍手して微笑んだ。

「さすが！やっぱリーダーはこうじゃなくちゃね！素敵よチャンスー！」

「そうよファイン、だからこうしてカヴァル湖に向かってるんだもの、気落ちしてる暇はないわよ。ハンクと薄暮の獅子を出し抜いて、カヴァルダインの地底遺跡に乗り込むんだから。」

「騒動の発端である財宝がなくなってしまうば、双方とも無駄な争いをする意義を失いますからね。一筋縄ではいきませんが、やりがいがありますよ。風の神の怒りに触れた墮落の街がどういところか、興味もありますしね。」

「生贄を使わないと手に入らない財宝ってのがちよつと引っ掛かるけどな。まあ、生贄が足りねえなら、薄暮の獅子の連中全員召し上げてやろうぜ。神様には迷惑かもしれねえけどよ。」

チャンスは懷から小さな石版を取り出し、焚き火にかざしてその文字を見つめる。

「明日のうちにはカヴァル湖に着けるはずだから、探索はそこから本番だ。魔物と薄暮の獅子が待ってるだろうから、気を抜くんじやないぞファイン。おまえが生きて帰らな　きゃ、スティアは本当に独りぼっちになっちまう。メイヤーの代わりにスティアを守ることが、おまえにできるいちばんの恩返しだと思うぜ。」

チャンスたちの優しい笑みに見守られながら、革の籠手に覆われた拳を握り締めたファインは、力強くうなずいた。

魔物の印

死者を悼む鐘の音が響く中、教会を立ち去っていく葬列。かすかなすすり泣きが漏れる葬列は墓地へと向かい、真新しい墓石にひとりずつ花を手向けていく。

「メイヤー、今までよく尽くしてくれた。感謝するよ。」

キルア町長、ハンク・ヴェンドレーは眉間に深い皺を刻んでつぶやき、白い花を一輪、墓石の台座に乗せる。後に続いたのは、目を真っ赤に泣き腫らしたスティアだった。

仕事を終えて友人の酒場「白き角鹿」に向かい、そこで「不運にも火事に巻き込まれ」焼死したというメイヤー。こぼれ落ちる涙を受け止めた白い花を墓石に捧げると、スティアは嗚咽を噛み殺すことができず、大きく泣き崩れた。ハンクはスティアの肩を優しく抱きしめ、屋敷へと帰る葬列の後ろに続く。スティアの涙は止まることなく、静かな雨だれのように頬を伝い落ちていった。

そして、屋敷の玄関を潜り抜け扉を閉めた、直後。
ハンクはスティアを冷たく睨みつけた。

「公衆の面前で、はしたなく泣き喚くとは・・・淑やかさを常に忘れるなどっているだろう！」

スティアの肩を抱いていた手を素早く離し、大股に歩き去りながら苦々しげにつぶやくハンク。

「町長の娘ともあろう者が、醜態を曝しおって。」

どきりと身が縮むスティア。

いつもなら何も言わずにうなずくだけのスティアの胸に、その言葉が鋭く突き刺さった。

鬱陶しさを表情に貼り付けながら、ハンクは喪服の上着を乱暴に脱いで肩にかける。あんなに悲しげな顔をして悼みの言葉を口にしなから、舌の根も乾かぬうちにがらりと豹変するその態度に、スティアは思わず叫んでいた。

「・・・た、大切な人が亡くなったのです、泣くことがそんなにいけないことなのですか!？」

立ち去ろうとしていたハンクが、その声に振り返った。

肩を震わせ、涙に濡れた目で自分を見つめるスティア。しかしハンクは冷たい一瞥をスティアに向け、一呼吸置いて首を振った。

「立場というものをわきまえろ。使用人の一人が死んだくらいであれほど取り乱すなど、言語道断だ。」

赤らんだ目を見開き、言葉を失うスティア。

靴音はそれだけを吐き捨てて遠ざかり、スティアは身も心も、取り残される。

物心ついた時から一緒だったメイヤーは、スティアにとっては祖父のようなものだった。スティアの哀しみや喜びを共にし、常に守ってくれていたメイヤーはもう二度と、スティアの前に立つことはない。

心の通わぬ父と共にいるくらいなら、メイヤーとともに死んでしまいたい。

スティアはうつむき、静かに涙を落した。たった一人の味方を失った傷心のスティアは、自室へ戻るため死人のように歩き出す。

「お嬢様、お嬢様!」

右の廊下から、声がする。涙を拭いながらその方向を見ると、小間使いの一人がスティアに駆け寄ってきた。

「すみませんお嬢様、先ほど街へ買い物に行った時、これをお嬢様にお渡しするようにと言伝えまして・・・」

新しい小間使いだろうか。見たことのない顔だったが、スティアにはそれを考える余裕は皆無だった。人形のように虚ろな目で、小間使いに差し出された袋を受け取り、部屋へと戻るスティア。唯一の「避難所」であるこの部屋も、メイヤーがいなくなってしまった今ではその意味すらも薄れていく。

スティアはベッドに腰掛けると、小間使いに貰った袋を開き、中を覗いて見た。小さな紙切れが折り畳まれ、奥に収まっている。

訝しげにそれを取り出し、開いて見た。

『メイヤーを殺したのは誰だ?』

飛び込んできた文字に、スティアの心が殴打される。跳ね上がる鼓動。

『正午、墓地へ来い。すべて教えてやる。』

手紙を手に、がくがくと震え出すスティア。

「そんな・・・どうして? お父様はそんなこと、一言も・・・! こ、殺されたって・・・」

その言葉尻をすくうように、教会の鐘が鳴り始めた。正午の鐘だ。スティアは手紙を握り締め、走り出した。余裕も、冷静さも、心

の平穩のすべてを欠いた状態のまま、スティアは屋敷を飛び出していく。昼食の支度で忙しい小間使いたちは台所にひしめき合っていて、スティアが屋敷を出て行ったことに気付く者は誰もいなかった。

「いつてらっしゃい、お嬢ちゃん・・・」

唯一、含み笑いを浮かべてスティアの後ろ姿を見送る、あの小間使いを除いては。

・・・

鋭い唸りと共に繰り出される、鉤爪の雨。チャンスとマーティはそれらを素早くかわしながら後退し、それぞれ剣と槍を構えなおす。黒と灰色の斑模様をした剛毛で全身を覆い、見上げるほどの巨体に伸びる四本の腕で構える魔物。熊と猿人を掛け合わせたかのような容貌に、小山のように盛り上がる隆々とした筋肉、黒い鉤爪で木々や蔦を引き裂き、真っ直ぐにチャンスたちを狙ってくる。

「キルアの街道で見た魔物どもより、格段に強いな。大したところだぜカヴァル湖ってのは・・・」

チャンスが呆れながらつぶやく後ろから、サージが魔物目がけて石つぶてを投げつけた。それを払いのけようと手を振り上げた魔物の隙を、チャンスは見逃さない。暗黙の合図で踏み込んだチャンス
の黒い長剣が、魔物の脇腹に突き刺さった。

『があああっ！』

チャンスは剣を魔物に突き刺したまま飛び退る。そこへ狙いすましたようにエキシイの呪文が降り注ぐ。

「すべてを焼き焦がす眩き光の力持て、鋭き稲妻よ、我が意に従え！」

魔術師の指輪から火花を飛び散らせた白い光の筋が放たれ、チャンスの剣にすらりと溶け込む。光はその一瞬後、魔物の巨体を包み込んで一気に弾けた。体に深く突き刺された剣により、凄まじい稲妻の力を全身をくまなく浴びることになった魔物は、その一瞬で全身の剛毛を逆立て、耳や鼻、口から異臭とともに煙を上げて倒れ伏す。

「中までしっかり「焼き」が入ったみてえだな。ま、食う気にはなんねえけど。」

サージがそうつぶやいて、マーティとともに魔物の死骸を調べ始める。その様子を不思議そうに見つめるファイン。

「魔物の死骸なんか調べて、どうするんだ？」

「何よファイン、魔物にも色々種類があるのよ、知らないの？」

エキシイがファインの隣に立ち、顎をしゃくって魔物の死骸を指す。

「もともと森に住んでいる以外の魔物には、大抵その印があるものなの。」

「印？」

「遺跡の罫なんかで次々沸き出る魔物なんかには、その罫を施した術者の印が魔物のどこかに浮かび上がるわ、召喚術も同じよ。魔物

を呼び出したのが誰か、それを見ると分かるってわけなの。」

見た目に似合わず博識なエキシイの言葉に、ファインは感心しながらうなずいた。魔物の脇腹から剣を引き抜き、異臭を放つ黄土色の体液を振り払うチャンスは、それを鞘に収めてファインにやりと笑いかける。

「カヴァルダインは、風の神を崇めるために作られた。遺跡が生み出す魔物どもには、恐らく力ある神官級の印が施されているに違いない。でもそれ以外の場合は・・・」

「あった！」

チャンスの言葉を遮るように、サージが声を上げる。

魔物の後頭部、剛毛と皮に挟まれながらも黒く浮き上がる、小さな痣のような「印」。それを睨みつけながら、サージが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「・・・遺跡がらみの魔物じゃねえな・・・逆三角に渦巻き模様、こいつは召喚術師の印だ。」

「召喚術師・・・ほ、本当に!？」

「間違いねえよ。何だファイン、これくらいで怖気づいてちゃ先へ進めねえぜ。」

「おっ、怖気づいてなんかいねえよ!でも、は、初めて聞くからさ・・・」

そのやり取りを聞きながら、チャンスは胸から小さな石版を取り出す。その石版に刻まれたカヴァルダインの丸い印と、まるで違う魔物の痣の模様に、チャンスも大きくうなずいた。

「薄暮の獅子の仲間に、召喚術師がいるんだ。遺跡の周囲にわざと

強い魔物を配して、追っ手が深入りできないようにしてるんだろう。」

魔物の死骸が砂山のようにさらりと崩れはじめ、やがて跡形もなく消え失せてしまった。

「つまり、薄暮の獅子が深入りして欲しくないところに、魔物が配してあるということです。とりあえず目的地には近付いているようですね。」

「ああ、目印代わりみたいなもんだ。さて、次行ってみようぜ！」

チャンスは短剣を引き抜き、目の前を塞ぐ草むらを切り開きながら進んでいく。その迷いのない行動は一見して無謀だが、誰一人としてチャンスの動きに異議を唱える者はいない。

何があっても対処できる、経験に裏打ちされた自信をそれぞれが持ち、それを互いに信頼しているからこそ、堂々たる振る舞い。あれほどの魔物と立ち会ってもまったく怯まず、それを目印代わりとして軽く考えることなど、並みの心臓ではありえない。

ファインは小さなため息をついて、その後が続いた。

「あんたらと一緒にだと学ぶことが多いけど、その分、魂が磨り減っちゃまうよ・・・」

示された場所

偉大なルバールの息吹を聞け

雄々しきゼリオデのまなこを見よ

天地の狭間を繋ぐ永久の命より

曙の腕指す地かいなにあるは

風の神に護られし楽園カヴァルダイン

星明りさえも覆い隠す厚い森の天井は、焚き火の炎でうつすらと柔らかに光っている。深い森の中で夜を迎えることは、どの地においても危険なことに変わりはない。夜の魔物の餌食になるならまだ冒険者として救いがあるが、食虫植物などの肥しになって骨ごと溶かされてしまう情けない結末を避けるためにも、夜は静かに焚き火を焚くのが賢いやり方だった。

マーティは小さな石版に記された神語の意味を、皆に説明する。

「これにはカヴァルダインの繁栄を讃える詩が延々と並んでいます。神への感謝と賛辞は、最初と最後にしか刻まれていませんから、当時の墮落ぶりが伺えますね。その位置を示す重要な手がかりが、先に示した一文なのですが」

マーティの言葉が終わらぬうちに、森の中がざわざわと蠢いた。

エキシィはすつと魔術師の指輪をかざし、軽く指を弾く。その一瞬で昼間のように明るくなる焚き火の周囲に、低い唸り声がじりじりと沸きあがり始めた。

「ちょっとはゆっくり休ませてよね！お出迎えが早すぎるわよ、もう！」

エキシイがぶつぶつ悪態をつく間に、サージが懷からナイフダ―トをじゃらりと取り出し、ファインに目配せする。

「一匹二匹なんてもんじゃねえ、相当いるぞ。どの繁みから、何が飛び出してくるか分からねえ。気を抜くなよ」

「お、おう！」

声を上ずらせながら返事をしたファインがふと見ると、チャンスとマーティは焚き火の側に腰掛けたまま、石版を手に話し込んでいるではないか。ぎよつとして二人を見るが、立ち上がる気配はなさそう。ファインは思わず声を張り上げる。

「おいチャンスッ、マーティ！魔物！魔物！」

二人はファインに目を向けると、にっこりとうなずいた。

「うん、おまえたちで何とかしといてくれ」

「えええっ！？」

「大丈夫、危なくなったら加わりますから。頑張ってくださいねファイン」

それだけ言って、チャンスとマーティは再び地図と石版に向かい話し込む。

あんぐりと口を開け言葉を失うファインの様子に、サージが大きく吹き出した。

「ひやははは、何て顔してんだよへっぽこ拳闘士！いちいちビビってちゃキリがねえや！ははははは」

「ま、またへっぽこ拳闘士って言ったな！やめろよそれ！」

腹を抱えて笑い出すサージの大きな声が引き金となったのか、ざわついた繁みが大きく波打ちながら迫ってくる。ハッとして身構えるファインの前に、同じく笑いを噛み殺しながらノーマがすっと歩み出た。

「風の精霊レクセアスよ、我が名において命ずる！我に仇なす者どもを切り裂きの風で舞い上げよ！」

精霊の腕輪に添えた手を振り上げる。ノーマを中心に空気が大きくうねったかと思うと、濃密な空気の膜が見る間に周囲を渦巻き始める。それは次第に膨張して森の木々や繁みを巻き込み、捻られた枝がめきめきと悲鳴を上げた。その森の絶叫とともに、唸りを上げる黒い魔物たちが次々と上空に巻き上げられていく。

そして竜巻は、唐突に立ち消える。焚き火の炎をそのままに、その周囲だけが大きく削がれて広場のようにになっている。

「ファイン、来るぞ！」

「えっ!？」

風がやむと同時に、黒い塊が十数個、サージたち目がけて突進してきた。大人の頭ほどの大きさの体を黒い毛で覆い、蟲を思わせる無数の足で素早く動く。

サージとファインが同時に身構えようとしたその時、歩き疲れて機嫌の悪いエキシイが、無然とした顔で魔術師の指輪を閃かせた。

「猛る炎の力持て、紅蓮の蛇どもよ、我が意に従え！」

爆発に似た轟音を響かせ、炎の蛇が次々と指輪から吐き出される。それらは黒い塊を瞬時に包んで飲み込むと、ささやかな火柱を上げて焼失し、地面に黒い焦げ跡を残していった。

瞬く間に動くものがなくなってしまった森の中で、呆然と立ち尽くすファインの耳に、エキシイの悪態が聞こえてくる。

「道なき道を歩くのは疲れるのよ、もう！今度あちきの邪魔したら、森ごと燃やしてやるから！」

「はは、それいいなア、余計な手間が省けるな！」

相槌を打って大笑いするサージ。先ほどの死を匂わせるような緊張感が瞬く間に消え、呆気にとられるファインに、焚き火の側のチャンスがにやりと笑いかける。

「こいよファイン、カヴァルダインの遺跡の場所の目星がついたぜ」
「ほ、ホントかよ！」

慌てて焚き火の元へ駆け寄るファイン。チャンスとマーティは地図と石版を地面に置くと、自分たちのいる場所に小石を置いた。

「さっき私が読んだ石版の文字の中に『偉大なルバールの息吹を聞け』という件くだりがありますが、それは多分、カヴァル湖に流れ込む滝のことではないかと思うのです。ルバール神は水の神ですからね。カヴァル湖に流れ込む滝は三つありますので、とりあえず」

マーティの指示通り小石を三つ、滝の場所へと置いていくチャンス。

「次に『雄々しきゼリオデのまなこを見よ』ですが……ゼリオデ神は山の神ですから、そのまなこというところと恐らく、山腹に走る亀裂かでなければ谷ではないかと思うんです。それと思しき場所が、ここと、ここ。このうち、滝に最も近いのはこちら、東の谷ですので、多分ここで間違いないでしょう」

谷の地点に小石を置き、条件に合わない部分の小石を取り除く。

「さらに、『天地の狭間を繋ぐ永久の命より』ですが、これは恐らく樹を指していると思うのです。木々は枝を天に伸ばし、根を地に沈め、長い年月を生きるものですから。滝の音が聞こえる谷に聳える、大きな樹を探せばいいのではないかと」

「で、最後の『曙の腕指す地にあるは』ってのは、その樹から見た曙、つまり朝陽の柱が下りる場所、ということだ。そこにカヴァルダインに通じる何かがある。それに……」

チャンスは石版を睨みつけ、ぐっとそれを握り締める。

「必ずそこに、薄暮の獅子がいる。石版の助言に従い、薄暮の獅子を追っかけてりゃカヴァルダインは目の前だ……腕が鳴るぜ」

そう言って微笑むチャンスのまなざしは、笑っていなかった。石版に刻まれたメイヤーの思いを共に握り締め、懐へしまいこむ。そしてゆっくりと立ち上がり、つぶやいた。

「まずは無事に東の谷に行きつかねえとな。さてとマーティ、次は俺らの出番だ」

「あ、はい。やはり多いですね……」

えっと疑問を投げかけようと口を開いたファインの腰に、かすかな地響きが伝わってきた。マーティが素早く立ち上がって槍を構えると、繁みを割って灰緑色の大蜥蜴がずりりと顔を出した。強靱な皮膚からは無数の鋭い棘が突き出っていて、焚き火の炎を反射して鈍く光を湛えている。

黒い長剣を引き抜き、身構えるチャンス。

「腕ならしにやちようどいい。おまえらゆっくり休んでろ、棘が飛んできたらよけろよ」

「はあい」

「チャンス、そいつの牙には毒があるから気をつけろよ」

ファインは息を飲む。が、すぐに息を整えて、つぶやいた。

「……お、お手並み拝見」

チャンスはファインに振り返ってにやりと笑うと、剣を片手に棘蜥蜴に躍りかかっていった。

黒き召喚術師

「旦那様、屋敷内をくまなく探しましたが、お嬢様のお姿はどこにも……！」

キルア町長ハンク・ヴェンドレーの屋敷では、蜂の巣を突付いたような騒動が起きていた。

夕食の時間になっても現れないスティアを呼びに、召使いがスティアの部屋を訪ねたところ、そこは暗闇が支配するもぬけの殻となっていた。召使いたちは屋敷中を探し回ったが、それでもスティアは見つからなかった。

独り自室で夕食を取っていたハンクは当初、血相を変えた召使いたちを相手に、気だるそうにこう言い捨てた。

「メイヤーがいなくなって不安定になってるんだろう。腹が空けばすぐに顔を出さだろうから、放っておきなさい」

しかし。

夕食の時間をとうに過ぎ、黒梟が鳴き始める真夜中になっても、スティアの所在は分からない。右往左往する召使いたち同様、ようやくハンクも事の重大さに気付き始める。

「庭も小屋も、厩も全部引っくり返して探すんだ！ まったく……町長の娘ともあろう者が何たることだ、こんな馬鹿げたことをして私に反抗しようなど！」

スティアが自分に背き拗ねているのだとしか考えないハンクは、苛立ちを押さえきれず椅子を蹴り飛ばす。召使いたちがランプを手に真夜中の屋敷を駆け回る様子を、砂を噛むような顔で睨みつけて

いた、その矢先。

「旦那様、こんなものが玄関前に置いてありました」

召使いの一人がやって来て、黒い封書をハンクに差し出す。

あからさまに鬱陶しいと言いたげな顔で召使いに振り返ったハンクは、封書の表に殴り書きされた見覚えのある印を見た瞬間、ハツとして目を見開いた。召使いから封書を奪い取ると、わなわなと震えながら封書を開く。

そこには、ハンクの予想通りの短い文字が並んでいた。

『かつての同胞よ、娘は預かった。無事返して欲しくば、余計な手出し一切無用。不穏な動きあらば、生きたまま娘の腹を切り裂き生贄とする。薄暮の獅子』

「な……んだと……！」

じつとりと、冷や汗が滲む。

自分の動きを読まれていたことへの驚きと、娘を人質に取られた焦りが、ハンクの胸の中で猛烈に渦巻いていく。

しかしその混沌とした心の中に、娘を思う父の心情は浮かばなかった。娘を攫われた町長としての体裁をどう取り繕うか、薄暮の獅子へ今後どう対抗するかという、黒く薄汚れた意識だけが先走るハンク。

封書を持ってきた召使いはハンクを見つめながら、会釈して部屋を出て行く。振り返りざまに浮かべたその冷たい笑みに、ハンクが気付く事はなかった。

……

暗闇に灯された三つのランタンに浮かぶ、数名の人影。闇に眼が慣れてさえ認識するのが困難な黒いローブに身を包んだ人影たちは、皆ひとつの方向を向いていた。

それらの視線の先には、長身痩躯の黒い影。手にした杖に、淡く紅い小さな光が四つ、ゆったりとまとわりついている。その四つの光のうち一つが、次第に薄らいで消えていくのを見つめ、黒い影は苦々しげな声を絞り出す。

「……大した腕前だ、俺の召喚した魔物どもをことごとく蹴散らしやがる……どうする頭領、チャンスとかいう奴ら、大分近くまできてやがるぜ」

男の視線の先に、同じく長身の影が立っている。ランタンの明かりに向けて顔を上げた影、薄暮の獅子の頭領ダグは、鼻から右頬にかけて走る傷を撫でながらにやりと笑った。

「依頼主が焼き殺されたってのに、わざわざ鼻面を突っ込みにくるような連中だ、一筋縄では倒せやしねえだろうぜ。普通のボンクラどもなら、おまえの召喚した魔物を見りゃケツまくって逃げ出すってのによ。なあジレ」

ジレと呼ばれた、アルル人らしき長身の男は、目深にかぶった黒いフードの下からダグを見つめ、召喚術師の杖を軽く振るった。杖を取り巻く、残る三つの光が軽く震える。

「俺が一度に召喚できる魔物は七体までだ。その七つの命が果てるまで、新しい召喚魔法は使えねえ。頭領、もし七体目が倒されたら、奴らこのカヴァルダインの入り口を見つけちまうぜ」

「ビビるんじゃないよジレ、その時はまた新しく魔物どもを召喚すりゃいいんだ。おまえの力なら容易いだろうがよ」

「……高位召喚魔法『七つ首』は詠唱を終えるまでに時間がかかる。七体全部雁首揃えて呼び出すまでに、半日以上費やすぜ。下級の魔物を単体で呼び出すなら、それでもねえが……」

ダグは、ジレの言葉に含み笑いを返す。

「万一、カヴァルダインへの入り口を見つけられたところで慌てるこたあねえよ、お宝が眠るこの城に近づけなきゃいいだけだ。期待してるぜジレ、奴らを城へ一步も入れんなよ。奴らのことはおまえに任すからな」

「ああ……俺たちは城を出てるぜ。ここは魔力が一切使えねえからな」

ジレはうなずきながら踵を返し、手下数人を連れて深い闇に消えていった。靴音もなく立ち去ったジレたちの気配がなくなると、ダグは小さく苦笑する。

「チャンス、とか言ったか……下っ端の使い走りとはいえ、薄暮の獅子の一員を捕らえて口を割らせるたあ、やってくれるぜ。おかげで大事な手下を一人、口を滑らせた裏切り者としてブツ殺しちまったからな……おう、おまえら！この償いとして、奴らに架すものは何だ！？」

ダグは暗闇に呼びかけた。ランタンの灯りの届かない場所から、次々と声が弾ける。

「速やかなる死！」

「苦痛をもたらす死！」

「血の海でのたうつ死！」

顔に走る傷を歪ませて、ダグはにやりと笑った。

「くくく……そうだ、全部だ。その全部を奴らにくれてやるぜ……！」

悪鬼のごとき笑みに満たされるダグの足元に、すっと影が伸びる。

「頭領、キルア町長の可愛いお嬢ちゃん、無事に捕獲成功だとさ」

背中に翼のあるファイファス人の男が、精霊の腕輪を撫でながらローブの下からつぶやいた。ダグは軽くうなずき、高らかな笑い声を部屋に響かせる。

「ははは、ザマあ見やがれ！ハンクの野郎の不様な顔が目には浮かぶぜ！お嬢さんはここに着き次第、『陛下』に会わせて差し上げろ！大事な生贄だ、ズタ袋に詰め込んだまま、丁重にな！」

ダグの笑い声は、闇に覆われた回廊にじんわりと沁み込み、ゆっくりと消え去っていった。

……

森の木々を縫って現れた、漆黒の鱗をまとう長い胴体を持つ五つ頭の魔物を倒したチャンスは、大きく深呼吸して事切れたその姿を凝視する。

老爺のごとく深い皺が刻まれた顔に、新品の櫛のように隙間なく

並んだ牙が不釣合いなその頭を、だらりと三つぶら下げた奇妙な魔物。二つの頭はチャンスが長剣で斬り飛ばし、繁みの中に叩き込んでしまったため、鋭い切り口が 二つ露出したままになっている。

やはり、五つの首の付け根には、召喚術師の印があった。

「こんな魔物を呼び出せる召喚術師には、お目にかかったことがないわ」

エキシィが身震いしながら指を軽く鳴らすと、魔物は見る間に炎に舐められて燃え上がり、程なく一塊の灰と化してしまう。ノーマも小さくため息をつき、残された灰を見つめてつぶやく。

「召喚術師はその力に応じて、呼び出せる魔物の数や強さが違うと言われているけど……これだけの魔物を呼び出せるって、相当な使い手ね……」

ノーマのつぶやきを聞きながら額の汗を拭い、チャンスは背後を振り返る。

「父なるトレフィノ大神、偉大なる全能神よ、従属神の御力を我が身に宿らせ給え。月の女神よ、御力を」

マーティの左手が蒼白く輝き出す。

その傍らには、目を見開いたまま倒れ伏し、手足をがくがくと震わせもがき喘ぐファインがいた。蒼白く光る左手をファインの額に押し当てながら、マーティは右手で月の女神の印を結ぶ。

「哀れなる御子の脆き心を護り給え、邪な力に慄く心の光を取り戻したまえ」

マーティが聖句の詠唱を終えるが早いか、ファインの体全体に蒼白い光が走る。ファインはその一瞬の後、目を閉じて速やかに意識を手放す。脱力し昏睡したファインの様子を見つめながら、マーティは厳しい表情でチャンスを見た。

「ファインはまだ精神的に成長途上ですから、精神をかき乱す魔物の邪眼に対抗しきれないのでね。このままではファインは、今みたいな魔物と戦うたびに錯乱してしまいますよ、チャンス」

「冗談じゃねえよ！魔物相手でも大変なのに、錯乱したへっぽこ拳闘士の拳まで避けなきゃいけねえんじゃ、おちおち戦ってらんねえぜ！」

腕にできた蒼い痣を撫でながら、サージがぶつぶつと悪態をついた。

五つ首の魔物と戦っている最中。

魔物の邪眼に魅入られたファインは突然、金切り声を上げてチャンスたちに拳を向けた。まなざしに狂気を宿らせたファインの迷いのない拳は、普段より素早くて的確に繰り出されてチャンスたちに襲い掛かった。

中級以上に属する魔物の中には、精神をかき乱す視線『蛇眼』を持つ者がいて、その視線に魅入られると錯乱状態に陥る。蛇眼によって錯乱した者は敵味方の区別がなくなり、動くものすべてに攻撃を仕掛けてしまうのだ。

マーティが短剣を取り出しながらつぶやいた。

「根本的な解決法ではありませんが、心の平穏をもたらす月の女神ユヌの印を刻んだ護符を作ってみましょう。短時間の戦闘だったら何とか対抗できるかもしれません」

「ああ、悪いなマーティ。頼むぜ」

「戦いのたびに腹に一発ぶち込んで、眠らせた方が早いんじゃないねえ

のか、チャンス」

さらっと悪態をつくサージ。チャンスは長剣を振るって鞘に収める。

「無茶言うなよ。ファインを眠らせちまえば俺たちは楽だが、ファイン自身のためにならない。戦いの中で成長するのが剣士や拳闘士ってもんだ。おまえだってそうだっただろ？」

「……まあ、そうだけだな……ちえっ、まったく、面倒くせえ連れだぜ」

昏睡するファインの横、平たい石に丁寧に印を刻んでいくマーティを見つめたチャンスは、わずかに森の隙間から見えるカヴァル湖に目をやる。

東の谷は、もうすぐだ。

襲来

陽の光が細い剣先のように地面に突き立つだけの、鬱蒼とした森の中を黙々と歩き続けるチャンスたち。もともとフェンディア島はマントも必要ないほど暖かな気候に恵まれているため、陽の光が遮られているとはいえ、昼間は汗が出るほど気温が高くなる。

「湖が近くに見えるのに、入れないって辛いわあ……水浴びしたい！」

汗をかいた首筋に張り付く黄金色の髪の毛を、鬱陶しそうに払いのけてつぶやくエキシィ。珍しく口数の少ないサージは、暑さに参っているのか無表情で汗を滴らせている。マーティも額の汗を拭いながら地図を見つめ、エキシィに微笑みかける。

「地図上では、この先に川があるはずですよ」

「ほんと！？　ねえチャンス、そこでちょっと休んでいこうよ、ねっ？　お願い」

上目遣いにおねだりの笑みを浮かべるエキシィに、チャンスが苦笑しながらうなずいた。

「わあい、やったー！」

チャンスは髪をかき上げ、エキシィのはしゃぎようを見つめて肩をすくめる。

「ただし、川沿いは獣や魔物がよく出る危険地帯だからな、気を抜くなよ。素っ裸のところへ助けに入って、平手喰らうのはごめんだ

ぜ」

「大丈夫よお、そのくらいでブツ飛ばしたりしないわ。チャンスなら大歓迎よねえ、ノーマ？」

にやりと意味ありげに微笑んで、エキシィがノーマを見る。ノーマは急に話を振られ、顔を紅くしながら必死に首を振った。

「ほんじゃ俺たちは、水浴びの最中に強い魔物が出てくれることを祈っとくか。なあファイン」

含み笑いを漏らしてサージがつぶやく。
が、返事はなかった。

「ファイン？」

サージが振り返ると、ファインは虚ろな目を地面に落とし、口を引き結んでいた。サージは小さくため息をつき、ファインの頭を軽く小突く。

「おい、ファイン！ 聞こえてるかー？」

「えっ、あ……な、何だよ、聞いてるよ」

「ほう。じゃ、何話してたか言ってみな」

「……えっと……」

口ごもるファインの頭を、さらに軽く殴り飛ばすサージ。

「馬鹿野郎。いつまでグジグジやってやがる。しっかりしろよ！」

吐き捨てるように言い放つサージに、返す言葉もないファイン。チャンスは歩き出しながら、ファインの隣に立った。

「マーティが月の女神の護符を作ってくれただろ。あれがあれば、どんな邪眼を持つ魔物と戦っても、酷い錯乱状態にはならずにすむはずだ。まあ…二、三回で壊れちまうだろうが」

「……うん」

チャンスの言葉を聞きながら拳を握り締め、うつむくファイン。

「ごめんチャンス……俺、本当に役立たずなんだな」

「最初から万能な奴はいねえよ、気にするな」

ファインはうつむいたまま、足元を這う小さな蜈蚣を踏みつける。その様子を横目で見ていたノーマが、微笑みながらつぶやいた。

「ねえファイン、私も駆け出しの頃、魔物の邪眼で何度も錯乱したことがあるわ。その当時の仲間たちから、そのたびにこっぴどく叱られたものよ」

手近に実った木の実を箸取りながら、エキシイもその言葉尻に続ける。

「冒険してれば、必ず魔物の邪眼に一度はやられるわよね。あちきも味方の連中を、魔物ともども黒焦げにしちゃったことがあったわよ」

「エキシイ、そんな悪党だったのかよ！ ひっでえ奴！」

サージがエキシイを見つめて目を丸くする。

「そういう悪党は俺だけだと思ってた。俺ん時は、錯乱して毒針吹きまくっちゃって、盗賊仲間五人全員殺しちゃった。仕方ないから、

ありがたく全員の持ち物をもらってトングラしたけどな」

「……錯乱した振りをしたんじゃないでしょうね、サージ」
「んな器用な真似できるかつーの！」

マーティの鋭い視線もどこ吹く風、サージが舌を出しながら鼻で笑い飛ばす。

チャンスはファインの肩を叩き、にやりと笑った。

「というわけだ。誰でも一度は経験することだ、そうヘコむなよ。おまえの心が成長すれば、邪眼に魅入られることもなくなる。それまでは試練だと思って乗り切るしかねえよ」

「心の成長……大人になればいいってことか？」
「違う」

下手くそな網のように絡まり行く手を阻む蔦の壁へ、短剣を一閃させるチャンス。はらりと、布切れが落ちるように蔦が切り落とされ、その足元にとぐろを巻いた。

「大人になっても図体だけで、まったく心が成長してない連中は山ほどいる。反対に、ナリはガキでも大人以上に強い心を持つ奴もいる。自分で変えることのできない年齢のせいにする前に、もっと色々できることがあるはずだ」

「……でも、心なんて……どうやって鍛えればいいんだよ」
「簡単さ」

蔦を踏みしめて歩みを進めながら、事も無げにつぶやくチャンス。目の前に生い茂っていた木々がまばらになり、心地よい川のせせらぎが耳に届き始めた。

「脇目も振らず、一所懸命になりゃいいんだ」

そう言っすぐ、チャンスは歩みを止めた。

川を目の前にして躍り上がりそうになっていたエキシイも、チャンスの様子を見た途端に口を閉ざし、魔術師の指輪をはめた手を引いて身構える。マーティが槍を構え、サージが帯剣ベルトから短剣を引き抜く間に、ノーマが精霊の腕輪に手を添えて意識を集中し始めた。

「忘れるなファイン、無我夢中、ガムシヤラでいいんだ。余計なことを考えず、目の前の敵を倒す事だけに集中しろ、いいな？」

チャンスが素早く長剣を引き抜くと同時に、川沿いの繁みから黒い影が三つ立ち上がった。

記憶に新しい広刃の曲刀が、木洩れ日を反射して眩しく輝く。目深にかぶったローブの奥から覗く、顔半分に施された奇妙な紋様が、チャンスたちを貫くように見据えている。

「薄暮の獅子……！」

ファインも低く身構え、一気に高まった緊張感に身震いする。

広刃の曲刀をかざし、じりじりと無言で迫る薄暮の獅子の三人。チャンスも同様に長剣を構えながら、にやりと笑った。

「カヴァルダインの遺跡はもうすぐなんだな？ でなきゃ、おまえらがこうして直に邪魔しにくるはずがない。そうだろ？」

返答は、ない。

微妙な状態で保たれた静寂が、薄氷を踏みしめるような緊迫感を与えてくる。

じりじりと、近付いてくる薄暮の獅子。

少しずつ、後退るチャンス。

「……どうせなら、エキシィとノーマが水浴びしてる最中に、来て欲しかったな」

口元に笑みを貼り付け、サージが小さくつぶやいた、瞬間。
無言で押し寄せる殺気の波が、チャンスたちに一気に迫った。

「はっ！」

正面から向かってきた薄暮の獅子の一人に、鋭く剣を突き出すチャンス。薄暮の獅子はローブを切り裂かれながらもその刃をかわし、擦れ違いざまに広刃の曲刀を疾風のごとく一閃させる。すばやく体を斜めにして曲刀の刃を避けたチャンスの目に、さらりと自分の髪の毛が落ちてくるのが見えた。

ザッと身を引いて対峙する、薄暮の獅子とチャンス。睨み合う視線に見えぬ火花が飛ぶ。

「ちっ、認めたくねえけど、やっぱおまえら並じゃねえ……早え……ッ」

サージに向かってきた小柄な薄暮の獅子は、広刃の曲刀で風を斬りながら勢いよく押し進んでくる。サージと同じバンタム人らしきその薄暮の獅子は、息遣いを乱すことなくサージをじりじりと追い詰める。二本の短剣で応戦するサージとの間、耳障りな金属音が鋭く鳴り響いて森中に突き刺さっていく。

サージが防戦に手間取る様を横目にしながら、三人目の薄暮の獅子の鋭い切り込みをかわすだけで精一杯のマーティは、僧衣の端をすでに切り落とされていた。長い槍は森の中では自在に操ることができず、極端に動きが悪くなって思うように戦えないマーティ。

一瞬焦りの色を浮かべて視線が泳いだマーティの隙に、広刃の曲刀のきらめきが襲い掛かる。

「危ない！」

ファインが素早く薄暮の獅子に突っ込み、曲刀を持つ腕を横から蹴りつけた。その反動で体を捻った薄暮の獅子は、返す勢いでファインに向けて足蹴りを放つ。その動きを見切っていたファインはそれを受け流して身を屈め、足払いをかける。

「！」

鋭く足元をすくわれて、体が浮き上がる薄暮の獅子。その腹部にファインの拳が突き刺さると、広刃の曲刀が手から滑り落ちた。地面に投げ出されながらも、無言で素早く体勢を立て直す薄暮の獅子は、腰から短剣を取り出してファインとマーティに切っ先を向ける。吹き出す汗を軽く拭って身構えるファイン。マーティも槍を地面に置き、腰から短剣を引き抜いた。

「二人同時に行きましょう」

マーティの小さな声に、ファインがうなずこうとした、その時。

川の上流から、軋むような鋭い嘶きが聞こえてきた。

「魔物か！？こんな時に……！」

サージが悪態をつく間に、それは森の木々を縫うようにして現れた。

胸の悪くなる色合いの赤黒い胴体は、粘液をまといつかせて異常なほどの艶を帯び、奇妙に浮遊しながらチャンスたちに近付いてく

る。胴体を取り巻くように並んだ黒い目はそれぞれが別の方向を見据え、口と思しき場所には水生の魔物特有の、細長くおどましい触手がびっしりと生えている。脚のようでヒレにも見える鉤爪の生えたものが、長い胴体に等間隔に並んで蠢く様は、吐き気を催さずにはいられないほど醜悪だ。

チャンスが叫んだ。

「これがこいつらの狙いだ！俺たちを分断させるために……ノーマ、エキシィ、何とか持ちこたえてくれよ！」

あまりのおどましさに蒼白になりながら、ノーマとエキシィは素早く身構えて魔物に向き合った。

「は、はやく加勢してよね！こういうぬるぬる系はキライなのよ！」

生死を賭けた緊張感が臨界点に達する森の中。

心地よい川のせせらぎはすでにチャンスたちの耳から遠ざかり、己の早まっていく鼓動と、無理に抑えた息遣いだけが、全身を支配していた。

河岸の戦闘 1

ゆるゆると漂いながら、触手の蠢く口から吐き気をもよおす色合いの液体を滴らせ、ノーマとエキシィに目玉をむける魔物。よく見ると触手の先には鋭い棘が一本突き出っていて、それが恐るべき毒をもつ魔物であることを容易に想像させた。あらゆる自然の摂理を無視して浮遊する魔物の姿に肝を潰しながらも、ノーマは精霊の腕輪に手を添え震える声を絞り出す。

「樹木の精霊ヘステイエスよ、我が名において命ずる！ 我に仇なす者を、その雄々しき力の糧として血肉もろとも啜り尽くせ！」

腕輪からすらりと放たれた緑色の光が森へ溶け込むと、木々が一齐に揺らいで軋み、何本もの蔓が浮遊する魔物に襲いかかる。蔓は見る間に魔物を締め上げ、がんじがらめにしてしまったように、その時は見えた。

「あ！」

青褪めるノーマの前で、浮遊の魔物のぬるつく胴体から、さらに粘液が染み出した。幾重にも絡まった蔓の隙間から、おぞましいぬめりの音を響かせる浮遊の魔物は事も無げにぬるりと這い出し、黒い眼球でノーマを見据える。ぞっとして体中に鳥肌を立てるノーマに変わって、エキシィが魔術師の指輪を構えた。

「水に関わり深い魔物ならこれで勝負よ！ すべてを焼き焦がす眩き光の力持て、鋭き稲妻よ、我が意に従え！」

白銀の冷たい輝きが指輪から放たれた瞬間、エキシィの両手に大

きな球体の稲妻が浮かび上がった。鋭く両手を突き出し浮遊の魔物目がけてそれを弾き飛ばすと、球体だった稲妻が瞬きの間に魔物へ向けて疾駆し、その全身を強い雷撃で覆いつくす。目も眩む強い閃光と、耳をつんざく雷撃の響きが森中に響き渡った、直後。

「う、嘘でしょ!？」

強力な雷撃をものともせず、浮遊の魔物は身をぐんとうねらせて、あろうことか自身を覆っていた雷撃をエキシィに向けて跳ね返した。

「エキシィ危ない！」

驚愕の表情で固まったエキシィを、ノーマが素早く抱き込んで繁みに飛び込む。エキシィのいた場所に叩きつけられた雷撃は大袈裟なほどの爆音を立てて地面を抉り、土くれや千切れた雑草が一面に降り注いだ。

その土の雨を合図にして、チャンスたちの緊張が一気に解き放たれる。

「ふっ！」

軽く息を抜いて踏み込んだチャンスの動きにあわせ、薄暮の獅子は広刃の剣を一閃する。その刃を右へかわした勢いで、チャンスは風のごとき素早さで回し蹴りを放つ。かろうじてその軌跡を見切った薄暮の獅子が、チャンスのブーツの踵に装着した金具を皮一枚でかわし、距離をとろうと跳躍して身を返す最中、チャンスはその動きに追いつがって鋭く踏み込む。

ハッとして広刃の剣を突き出す薄暮の獅子。

黒い長剣を掲げ目を見開くチャンス。

耳障りな金属の軋みが短く響いた後、絡み合った二つの影の間に

血だまりがゆつくりと広がった。

「か……はあ」

かすかな呻きを漏らし、膝から地面に崩れ落ちた薄暮の獅子は、腹部に突き立てられた短剣を手にびくびくと痙攣する。黒い長剣の動きで薄暮の獅子の目を欺き、腰の短剣を抜き放って勝負に出たチャンスは、返り血を浴びたままその様を見つめ、動かなくなる敵の姿を目に焼き付ける。そのチャンスもまた、肩口と顎を薄く切り裂かれ、丸い宝石のように光る血の粒をぽたぽたと軽鎧に落としていた。

薄暮の獅子が白目を剥いたまま、指先だけを未練がましく痙攣させているのを見たところで、チャンスは屈み込んで短剣の柄に手をかける。まもなく物言わぬ死肉の塊と化す敗者、その体に刺さったままの短剣を軽く捻ると、薄暮の獅子はくたりと脱力し、命をあっけなく手放して息絶えた。

「つつ……痛エじゃねーか、この野郎ッ！」

その最中、森を劈く怒号を放ち、サージが腕から血を流しながら木々の間を駆け回っていた。追いつがる薄暮の獅子の刃をかわし、右に左に追い詰められていくサージの左腕に、丈夫なバンデージごと切り裂かれた長い傷が走っている。

薄暮の獅子が持つ広刃の剣と、サージが手にする二本の短剣。その場における二人の武器は一見してそのみであったが、共に盗賊として生きる二人の間にはそのほかにも、様々な武器が飛び交った。サージが針を吹き出した次の瞬間、薄暮の獅子の籠手から鋭い隠し武器が飛び出したり、薄暮の獅子が神経毒の目潰しを投げようとすると、サージ得意のナイフダートが矢継ぎ早に飛んできたりと、おいそれと接近戦に持ち込めない拮抗した状態が続いていた。

「せやッ！」

鋭い氣勢とともに、風を切るファインの拳が薄暮の獅子目がけて繰り出される。薄暮の獅子は拳をかわしつつ反転し、驚異的な跳躍力で大きく跳び退った。

刃をかわしながら森の奥に分け入っていくサージたちとは逆に、マーティとファインは戦いの舞台を次第に川辺へと移していた。広刃の剣を取り落とした薄暮の獅子は、向かい来るマーティとファイン相手に短剣を巧みに振るい、素早く退きながら身をかわしていく。その鋭い短剣の一閃をかわしきれなかったマーティの細い指先から血が滴り、ファインの脇腹もまた浅く切り裂かれ血が滲んでいる。

浅瀬の水を跳ね飛ばして砂利を踏みしめる三人の動きが、そこでぴたりと止まる。川といってもそれほど幅も深みもなく、浅いせせらぎが足をくぐって流れていく中、薄暮の獅子はローブの下から忙しなく視線を動かし、二人の動きを睨みつけている。薄暮の獅子の首に下がった魔封じの護符を見つめ、マーティは唇を噛んだ。

「魔法さえ使えれば……」

魔封じの護符は、敵味方の区別なく体に影響を及ぼす魔法の効力を無効化する。大層値の張る品物だが、その驚異的な力を求める者たちは引きも切らない。極限にまで高まった緊張に冷たい汗を流すファインの顔を見つめたマーティは、思わず目を見張った。焦りの色だけが張り付いていた表情に、瞬時にして自信が漲る。

血に濡れた指で印を結び、首から提げたトレフィノ神の印に重ね、マーティはせせらぎよりも涼やかな声で聖句を紡ぐ。

「父なるトレフィノ大神、偉大なる全能神よ、従属神の御力を我が身に宿らせ給え！ 風の神よ、御力を！」

魔封じの護符に守られた薄暮の獅子は、嘲るように口元をにやりと歪ませた。その邪な笑みには目もくれず、濃密な風が手の中に集まり始めたのを感じながらマーティは続ける。

「神々のしもべたる勇敢な我が友、ファインの歩みを猛き疾風の力にて守りたまえ！」

えっ、と目を丸くするファインに向けて、マーティは手に集中した風の塊をファインに向けて解き放った。

透明で、それでいて濃密に寄り集まった風が瞬きの隙間に薄暮の獅子の脇を駆け抜け、驚きの表情を浮かべたファインの体にすらりと溶け込む。ファインの体が一瞬発光するが、光はすぐに消え去って静寂をその場に落とす。

「ファイン、行って！」

マーティの鋭い声に、呆氣に取られていたファインがハッとして、素早く身構える。

「えっ、何だこれ!？」

目の前で動くものすべてが、酷く遅く見えた。

川のせせらぎがもたついた泥のように遅く蠢き、舞い落ちた木の葉はいつ地面に触れるのか想像もつかないほど遅々としている。そして、眼前で立ち尽くし短剣を構えた薄暮の獅子の動きもまた、緩慢な木の葉のごとく、やけにのんびりと映った。

ファインは目を睜り、その一瞬ですべてを理解する。

まわりが遅くなったのではなく、自分が、速く動いているのだと。水を蹴散らして強く踏み込み、一気に間合いを詰めながら右の拳

を引く。薄暮の獅子の口元とまなざしが、ファインの速さに怯み歪んでいくのを目の前に、革の籠手をまとうファインの拳が薄暮の獅子の顎を鋭く抉った。その勢いに乗せたまま左の拳を躍らせ、薄暮の獅子の顔面に叩き込む。

「んがあ……っ」

悲鳴までもがゆっくりと耳に届き、今更のようにファインは身震いした。

マーティはファインの勝利を見つめて軽く指を鳴らす。ファインの体から疾風がすらりと解け落ち、動きが元に戻ったところで、マーティは森に駆け戻りながらファインに叫んだ。

「私はサージの援護に行ってきます、後のことは任せましたよ」

ずきん、と胸が跳ねた。

生きるか死ぬかの瀬戸際を越えて、勝者となった者に架せられる重み。冒険者として生きる者の、暗黙の掟。

ファインは、薄暮の獅子が取り落とした短剣を、川のせせらぎの中から拾い上げ、握り締める。

「とどめ、を……」

指が震える。唇もまた、震えていた。歪んだ口元から血を流している薄暮の獅子に、おそろおそろの屈みこむ。

「うがあああっ！」

血走った目を唐突に見開き、薄暮の獅子がファインの目の前で飛び起きた。

指輪と籠手に仕込まれた猛毒の針をきらめかせ、ファインに覆い被さってくる薄暮の獅子。

「くっ！」

ファインは恐慌をきたしながらも、短剣を握り締めた手を鋭く突き出した。

硬いものを突き抜ける衝撃と、軽く弾ける、血煙。

もうマーティの魔法は解除されたはずなのに、その様は実にゆっくりだった。

ファインが繰り出した短剣の一撃を胸の中心に突き立てられ、薄暮の獅子はくると白目を向き、ゆっくりと仰向けに倒れ込んでいった。

「あっ……」

ファインが、軽く声を漏らす。薄暮の獅子はそれきり、二度と動くことはなかった。

全身に震えが走る。

生を得た自分、死を刻まれた敵。

過酷なさだめを目の前に叩きつけられたファインは、川の流れの中に力なくへたり込み、陽射しに照らされた骸をじっと、言葉をなくしたまま見つめ続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4642a/>

チャンス！ -地底遺跡カヴァルダイ-

2010年10月10日14時45分発行